昭和60年10月15日号（毎月２回１日、15日発行）第28巻・第20号　通巻641号　昭和54年６月２日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
20
10.15.



ユニバーシアード神戸大会

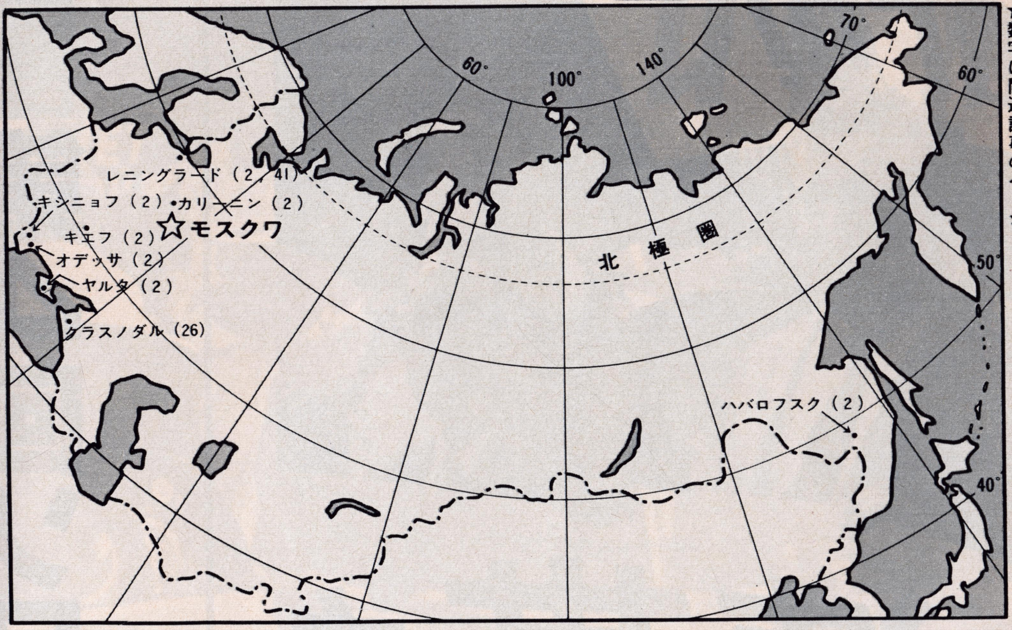
第4回ソ日「不戦の誓い」集会

レニングラードの大防潮堤

第20号　1985年10月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　ユニバーシアード神戸大会最終日の9月4日、走り高跳びで2m41の世界新記録をマークしたソ連のイーゴリ・パクリン選手（写真提供＝共同通信）

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141　東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町1—44
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。



不戦・非核・軍縮をめざした第4回ソ日「不戦の誓い」集会

カメラ
L・パラジン（モスクワ）
Y・ドベルニク（ハバロフスク）
V・リトシ（キエフ）
A・ワルフォロメーエフ（レニングラード）



反核を強く訴えたハバロフスクでの反戦行進。写真中央は横山利秋・日本代表団長

ソ連側のソ連対外友好・文化交流団体連合会とソ日協会、日本側の日ソ親善協会が主催する年中行事「ソ日不戦の誓い」集会が、ことしも8月9日から19日までソ連の多くの都市で開催された。「ソ日不戦の誓い」集会は一九八二年から毎年実施されており、ことしが第4回目。これまでの1－3回はそのつど本誌で紹介してきたので、読者の皆さんもご承知のことと思う。

第2次世界大戦終結、広島・長崎被爆40周年記念の第4回「ソ日不戦の誓い」集会には、日本の各界代表二〇〇人余りが参加した。その顔ぶれは国会議員、非核地帯を宣言した市や町の幹部、著名な学者と社会活動家、労組運動活動家、教師と学生、事務員と主婦など実に多彩であった。

モスクワで日本の反戦運動の活動家たちは、レーニン廟と無名戦士の墓の永遠の火に献花した。日本代表団の代表たちとの友好的な会談が対外友好会館で行われた。この会談でソ連の学者や社会団体代表は、日ソ双方が関心をもつテーマ――「ソ連の社会団体の平和擁護の活動について」、「平和な原子とソ連の環境保

全、「ソ日関係の若干の問題」などのテーマに関して報告した。さまざまな反戦行事、友好の夕べ、各人の好むテーマ別の会合、工場見学、ソ連の諸団体代表との会談は、モスクワをはじめレニングラード、キエフ、キシニョフ、オデッサ、ヤルタ、カリーニン、ハバロフスクで行われた。その模様についてハバロフスク、キエフ、レニングラード駐在の本誌記者は次のようなルポを送ってきた。



ハバロフスクで

8月10日朝ハバロフスクの各地区から市の目抜き通りやレーニン広場をめざして、労働者、職員、学生、中高校生のデモの列が集まってきた。その中には日本の平和運動家の隊列も見られた。何千人というデモ参加者たちは、ロシア語と日本語で「核戦争ノー!」、「ソ日親善を強めよう!」、「アメリカのスターウォーズ計画ノー!」などと書かれたプラカードを掲げ、二カ国語で平和の歌を歌った。行進参加者はレーニン像と永遠の火に献花した。

大祖国戦争(一九四一—四五年)中に戦没したハバロフスク地方の住民の名を刻んだ大理石碑のある栄光の広場で集会が催された。ソ日協会ハバロフスク支部長のミハイル・ダニロフスキー・ハバロフスク工科大学学長は、日本の代表団を歓迎するとともに、「40年前、米軍が広島、長崎に原爆を投下したという恐ろしいニュースが世界を震撼した。その原爆投下は第2次世界大戦最後の爆撃とはならず、全人類の未来を憂慮させる警鐘となった」と述べた。

M・ダニロフスキーの提案により、行進参加者は広島、長崎の原爆犠牲者に1分間の黙禱を捧げた。



モスクワの対外友好会館でクルグロワ・ソ連対外友好・文化交流団体連合会議長(右から二人目)と会談する日本代表団幹部



▲リュドビグ・ドモガリスキー・ハバロフスク地方人民代議員ソビエト執行委員会副議長と日本代表団幹部との会談

◀対独戦で死んだハバロフスク市民の碑に献花する日本代表団



▶ハバロフスクの日本人墓地を訪れた日本代表団

楽しい交歓風景(ハバロフスクで)





キエフで

8月11日の日曜日、キエフの何千人という市民は市の東端の地区に集まった。集合場所は元ダルニツキー収容所跡で、かつてナチ占領軍が六万五〇〇〇人余りの一般市民や軍事捕虜を銃殺、拷問し、ガス室で殺したところである。



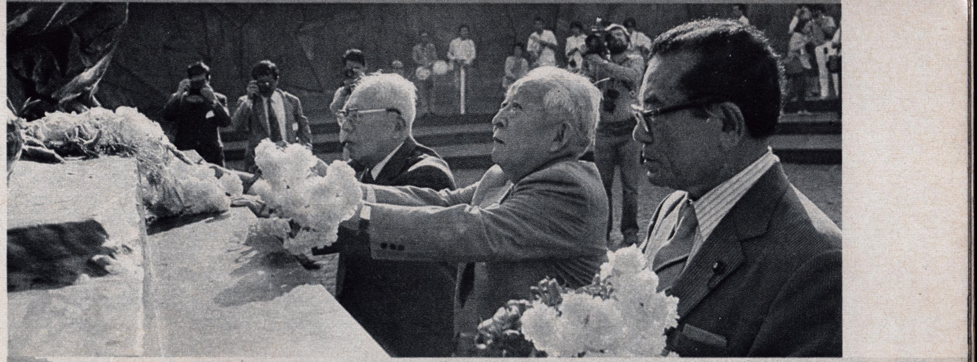
右　レニングラードのピスカリョフ墓地で軍縮をめざしてたたかう決意を表明する双方の代表

上　ピスカリョフ墓地で千羽鶴を配る。

ここでソ日双方の代表の反戦集会が行われた。

開会の言葉を述べたガリーナ・メンジェレス・キエフ市人民代議員ソビエト副議長は

「対ファシズム戦でソ連国民は二〇〇〇万人以上の犠牲者を出したが、そのうち五〇〇万人余りがウクライナ共和国に住んでいた人々である。ウクライナの約三〇〇の村は、ドイツ占領軍が住民を銃殺し、家をことごとく焼き払ったハティニ〔ベロルシア〕、リジツェ〔チェコスロバキア〕、オラドゥール〔フランス〕と同じ運命をたどった。私たちは戦争の恐ろしい災苦をよく知っている。だからこそ地球の平和を守るために全力を尽





▲▲レニングラードの戦没者の碑に献花する日本代表団の幹部。左から赤城宗徳・日ソ親善協会会長、宇都宮徳馬・核軍縮を求める22人委員会座長

▲レニングラード防衛者の碑の前で「戦争反対！」を訴える「不戦の誓い」集会参加者

くす決意である。あらゆる核実験を一方的に停止したソ連政府の決定を私たちは全面的に支持する」と訴えた。

日本代表団長、日ソ親善協会理事長、衆議院議員の横山利秋氏は次のように述べた。

「ファシズムの犠牲となったソ連の人々の聖なる墓所で、われわれは共同の反核闘争にあくまでも忠実であることを誓うものである。日本の軍国主義が起こした侵略戦争の結果、多くの日本の都市が焼かれ、何百万という人々が死んだ。また原爆の後遺症という重荷を背負いながら生きている人が何千人もいる。

われわれはソ連政府の平和的提案を高く評価している。広島の被爆記念日の8月6日に発効したあらゆる核実験を一方的に停止する決定こそ、原爆犠牲者への追悼の表れである。

全世界の平和愛好勢力は、核廃絶をめざして力を結集しなければならない。われわれは平和と軍縮を願う日ソ両国民の意思を体し、自分の活動を広げ、ますます多くの人を平和運動に引き入れ、積極的に働かねばならない。そうしてこそわれわれは、子や孫に平和な21世紀を引き渡すことができよう」

レニングラードで

第4回ソ日「不戦の誓い」集会に参加した日本代表団の人々は、8月14日から17日まで4日間をレニングラードで過ごした。

レニングラード友好会館の最終パーティーであいさつした横山団長は「短期間ではあったが、沢山のことを見聞し、理解し、感じることができた。滞在中ずっとわれわれは友好の温かい空気に包まれていた」と述べた。

8月15、16日、ここで反核・核兵器の凍結、撤廃・非核地帯の創設のためのソ日シンポジウムが開催され、ソ連側から著名な学者、社会団体代表らの大グループが参加。ソ連側のドミトリー・ペトロフ・ソ日協会副理事長（ソ連科学アカデミー極東研究所日本部長、教授）と日本側の横山団長が共同議長となった。

軍縮問題に関するソ連の著名学者の一人ウラジーミル・ラズメロム世界経済・国際関係研究所部長（教授）は「戦争防止の問題は、われわれの階級的目的であると同時に、民族的、全人類的目的である。30年余り前ソ連で、戦争は絶対に避けられないものではないというテーゼが出された。われわれは軍縮こそこの目的への道だと見ている」と語った。

日本のシンポジウム参加者たちはソ連の学者の意見に賛意を表した。

赤城宗徳・衆議院議員、日ソ親善協会会長は「私は防衛庁長官をしていたとき、核兵器は軍拡の抑制に役立つと考えていた。しかしその後数々の事実から私の考えが逆であることが分かった。私はミサイル核戦力の増強をめざす大国間の競争に断固反対する。米国の戦略防衛構想は平和を打ち壊す危険な歩みであり、各人がこのことをよく認識するのは非常に大事である。ソ連の平和提案、とくにミハイル・ゴルバチョフ党書記長の最近の声明は、ソ連の軍事的脅威という神話的テーゼの暴露に役立つものである」と述べた。

また宇都宮徳馬・参議院議員はソ連の新しいイニシアチブについて「ソ連が8月6日から一方的に実施した核実験のモラトリアムは、戦争の危険を除去する問題を解決する高いモラルに立ったアプローチの例である。ゴルバチョフ声明は、ソ連の平和的意図が不変であることを確認した」と評価した。

全ソ連人にとっての聖地ピスカリョフ墓地……ここにはドイツ・ファシスト軍の恐ろしい封鎖の時期に死んだ数十万のレニングラード市民が眠っている。ボリシェビチカ工場の縫製工ゾーヤ・サモレトワさん（ソ連婦人委員会委員）は、数千の市民が参加したこの墓地での反戦集会で、日本の代表たちに呼びかけた。

「飢えて死んだ私の母と妹がここに葬られている。兄も前線で死んだ。ドイツ軍がわが国を攻撃してきたとき、私はまだ子供だった。封鎖中の窮乏生活の苦しみは、口では言い表せない。生き残った者を代表してこう訴えたい。あの悲劇が繰り返されないよう皆で全力を尽くそう。平和を破壊させるな！」

第4回不戦の誓い集会の参加者は全会一致で要旨次のような決議を採択した。

「われわれは、あらゆる核実験を一方的に停止するというソ連政府の新しい平和的イニシアチブを心から歓迎し、支持する。この措置はすべての諸国民の利益と期待を具体化したものである。核保有諸国がソ連のモラトリアム宣言に



上 レニングラードの対外友好会館では双方の会合、討論が数多く行われた。



レニングラード市内を見物する日本代表団。前方のペトロパブロフスク要塞はツァー反動政治のシンボルだった。



キエフの「不戦の誓い」集会であいさつする「核軍縮を求める22人委員会」の谷内真理子さん



集会であいさつするニコライ・ミハイレンコ・ソ連参戦軍人委員会キエフ支部員

日本の平和運動家たちは数千のキエフ市民とともに、世界平和の確保に全力を尽くす決意をひれきしました。



キエフ見物



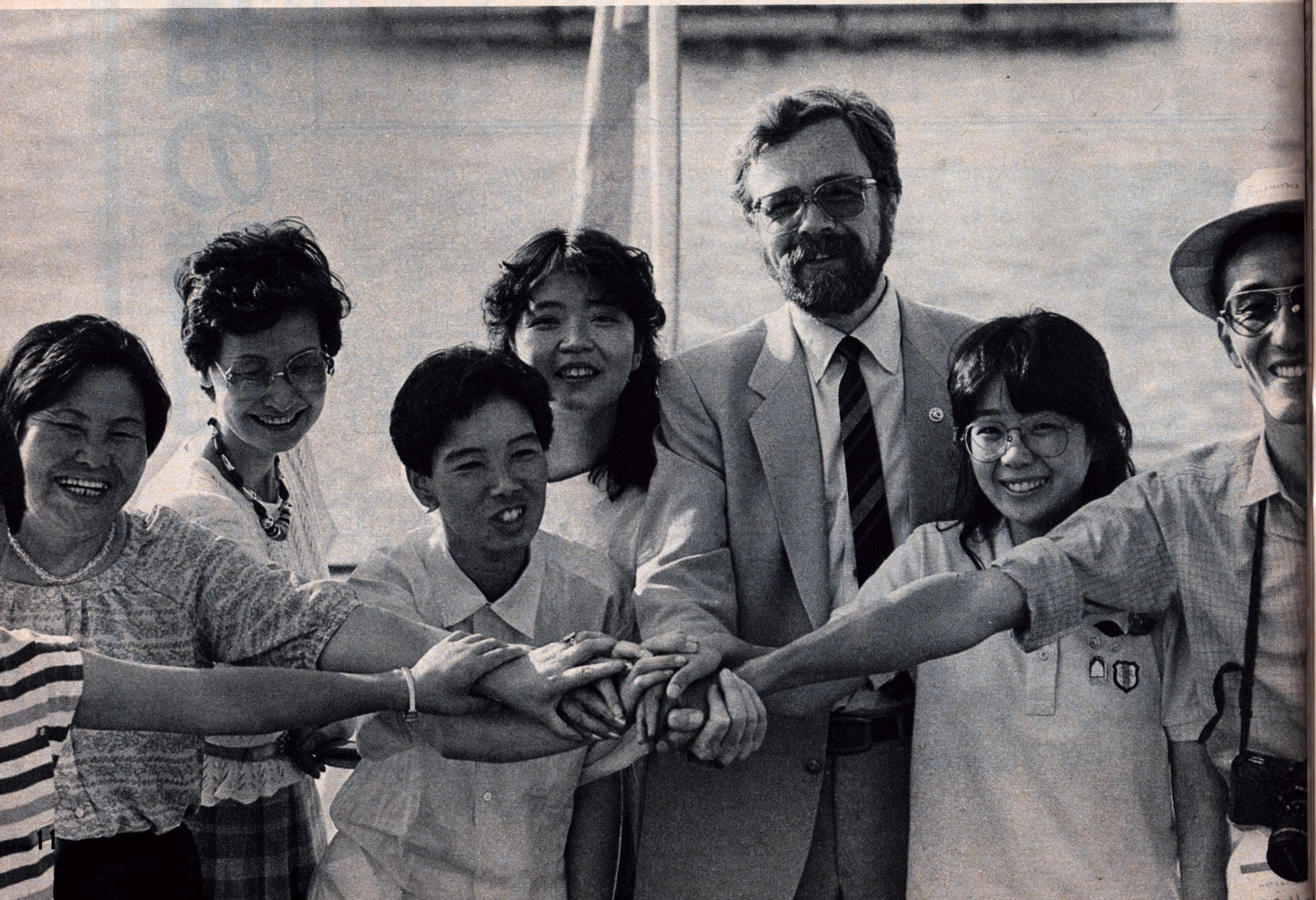
同調すれば、国際情勢の健全化や核戦争勃発の脅威の減退に役立つだろう。

核戦争を起こす人間憎悪の計画の実現を阻止し、共同の力で地上および宇宙における核軍備にとどめをさすために、全力を尽くすよう、進歩的な人々に呼びかける。世界平和評議会の決議によって定められた、あらゆる種類の核兵器の実験中止と日本の犠牲者との連帯をめざす行動週間に参加している世界のすべての進歩的な人々との連帯を、われわれは表明する。第2次世界大戦の犠牲者を追悼してわれわれがやらねばならない責務は、ソ日両国民が核の悲劇の深みに引き込まれるのを防ぐことである。よい隣人にふさわしく暮らそうではないか！」



キエフの「大祖国戦争博物館」メモリアル・コンプレクスを訪れた日本代表団

集会を通じて親しくなった人たちは、世界平和を守ってたたかうことを誓い合った。



デミチェフ文化相の訪日



P・デミチェフ・ソ連共産党中央委員会政治局員候補・ソ連文化相は中曽根首相を表敬訪問し、ミハイル・ゴルバチョフ党書記長の親書を手渡した（写真提供＝共同通信）。

9月12日から19日までP・N・デミチェフ・ソ連共産党中央委政治局員候補・ソ連文化相が日本を公式訪問した。

12日、文化相はつくば科学万博を訪れ、人気の高いソ連館を視察した。この日までにソ連館の入場者数は五〇〇万人以上に達した。文化相は日本その他の国々の展示館も視察した。多数の万博入場者が文化相を歓迎した。

翌13日、文化相は中曽根首相と会談し、M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長の親書（左上）を首相に手渡した。

中曽根首相は親書に感謝したあと、日本政府はさまざまな分野の対ソ接触、交流の拡大、深化を望んでいると述べた。

同日デミチェフ文化相は安倍外相と会談し、ソ日関係の広範な問題および若干の国際問題について有益な意見交換を行った。

双方は政治、通商・経済、文化その他の分野でのソ日関係の前進をはかるために、ソ日関係に新しい具体的な内容をもり込む必要があるという点で、意見が一致した。またさまざまなレベルの政治対話の重要性が強調された。

さらにデミチェフ文化相は三浦文化庁長官と会談した。双方はソ日両国民の相互理解を深め、国家関係に好ましい環境をつくるうえに、文化交流が重要な役割を果たすことを強調し、文化交流をさらに拡大することに賛成した。

9月14日、文化相は上野の東京国立博物館の「シルクロードの遺宝展」を観覧した。

さらに文化相は東京の日動画廊を訪問し、日本の画家たちと懇談した。日動画廊では、一九七九年と一九八一年にソ連へ写生旅行をした日本の画家たちの訪ソ作品展が開かれていた。

同日デミチェフ文化相は松前重義・日本対外文化協会会長と会談した。松前氏はソ連の平和を愛する対外政策を高く評価し、アジアの安全保障問題に対する総合的な態度を盛り込んだソ連の提案の重要性を強調した。松前氏は、対文協は政治、経済、科学技術、文化などの分野での日ソ間の交流を拡大するために全力を尽くすだろうと述べた。

※　※

9月14日、東京の日動画廊でデミチェフ・ソ連文化相と日本の画家たちとの会合が催され、両国の文化交流について話し合いが行われた。

日動画廊は一九七九年と八一年の夏に日本の画家グループのソ連旅行を企画し、これに参加した画家たちはソ連の数都市（一九七九年にはモスクワ、スズダリ、ウラジーミル、レニングラード、八一年にはモスクワ、レニングラード、キエフ、ノブゴロド）を訪れて、ソ連を題材とする絵画のためのスケッチをした。

デミチェフ文化相の訪日中に、日動画廊では訪ソ画家のソ連を描いた絵画展（風景画と肖像画が主体）が開かれた。

文化相は出展作品を賞賛し、この10年間のソ連文化省と日動画廊の協力の発展に強い満

中曽根首相あてのミハイル・ゴルバチョフの親書

P・N・デミチェフ・ソ連共産党中央委政治局員候補・ソ連文化相の訪日の機会を利用して、あなたにあいさつを送り、日本国民の幸福と繁栄を希望したいと思います。

この訪問のさいに行われる会見や会談――私はとりわけあなたや安倍外相その他の日本の国政担当者諸氏との会見を念頭に置いておりますが――は内容のあるものとなり、ソ日関係にとって有益なものとなるであろうと考えます。

本年3月14日にモスクワであなたとお話ししたことを、満足の念をもって思い起こしております。あのときわれわれはソ日関係の広範囲の問題を率直に話し合い、政治、経済、科学技術、文化その他の諸分野でこの関係を前向きに発展させることが重要だという点で意見の一致を見ました。特にわれわれは政治対話を拡大する課題をも審議しました。ごらんの通り、われわれはこれをめざす措置をとっており、P・N・デミチェフの貴国訪問もそれを示しております。

周知のように、われわれ両国間の文化交流は年ごとに拡大しております。ソ連の人々は日本国民の豊かな文化に多大の関心を寄せており、われわれの知る限りでは、日本でもロシア・ソビエト文化の達成に多大の関心が寄せられています。今回の訪問がこの分野での交流の一層の深まりを促進することを期待しております。

ソ連指導部は、最終的にはソ連と日本は共通の言葉を見つけねばならないと確信しております。ここで言うのは、双務関係だけでなく、もっと広範な面での諸問題のことでもあります。われわれは、日本政府がアジアの安全保障問題に対する総合的なアプローチの作成について最近打ち出された提案にしかるべき注意を払うことを期待しています。われわれがアジア大陸の諸国民の運命にとってきわめて重要なこの事業において積極的に協力し合うことができると思うからです。地上の平和についての共通の配慮と、さらにわれわれ両国が極東において隣接し合っていることが、このことを義務づけています。同じように、まさに善隣をわれわれの相互関係の決定的な要因にすることも義務づけています。

ソ連について言えば、ソ連は日本との良好な関係を発展させること、両国国民が利益を得るような具体的な内容によってそれを満たすことを一貫してめざしています。そして、この点は特に強調したいのですが、これは一日限りのものではなく、長期的な展望に立った路線です。われわれには、新しい互恵交流の確立とすでに確立されたものの拡大のために多くの実際的な措置をとる用意があります。同じ方向での貴国政府の努力はわれわれの側からの理解と支持を得るであろうと保証したいと思います。ソ日関係の根本的な改善への動きが相互的なものになるならば、われわれが成功を十二分に期待できることは、明らかであります。

M・ゴルバチョフ

一九八五年9月3日



安倍外相と会談するP・デミチェフ
（写真提供＝共同通信）

足の意を表明した。そのさい文化相は長谷川徳七・日動画廊社長の活動を高く評価した。
　文化相はこの会合であいさつし、次のように述べた。
「東京は初めてですが、ここで大勢の旧知の人や友人に会いました。ソ日交流が緊密なのは美術の分野だけではありません。音楽家や俳優の成功も、交流を深めるのに役立っています。昨日つくば科学万博へ行き、ソ連の舞踊、音楽アンサンブルの公演が、観客からとても受けているのを見ました。ソ連館の展示品の大半は芸術品ですが、日本の人々はこのソ連館をとても興味深く見ていました」
　さらに文化相は上野の東京国立博物館を観覧して好ましい印象を受けたと語った。
「国立博物館の〝シルクロードの遺宝展〟は、ソ連と日本が古代から文化を交流し、それが両国民の文化に深い影響を残したことをはっきり証明しています。
　しかし日動画廊を訪ねて、いまこの交流が古代よりもはるかに広く、充実し、対象が広がっていることを確信しました。ここに出展されている絵の作者の皆さんに会えて大変嬉しく思います。私はモスクワで皆さんに会ったときのことやそのとき見せてもらったスケッチを覚えております。あのときのスケッチが非常に円熟した、興味深い、芸術性の高い作品になっているのを見て感服しています。
　いまここで風景画や人物画に取り囲まれて、私はすぐにソ連にいるような気分になりました。日本の画家の皆さんがカンバスに愛情を込めてソ連を描かれたことに対し心からお礼を申します」
　さらに文化相は中曽根首相や安倍外相との会談について「この会談は日本側にもソ日両国民間の文化交流を一層拡大する可能性を探求する希望や志向があることを裏書きしています。しかしこの会談ではソ日交流のもっと幅広い交流計画が問題になりました」と語った。（A・ラザレフ）



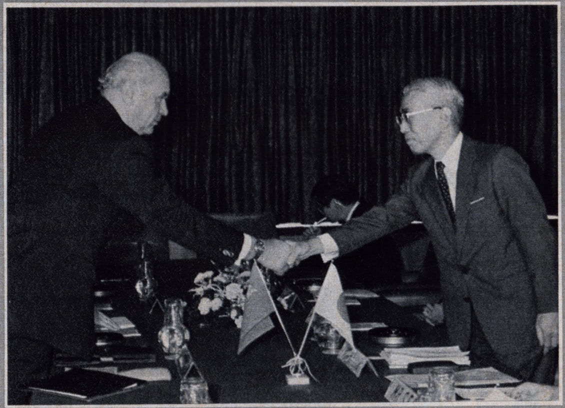
松前重義会長（右列手前から４人目）をはじめとする日本対外文化協会指導部との懇談（左列手前から４人目がＰ・デミチェフ、３人目がアブラシモフ駐日ソ連大使）。（写真提供＝東海大学校友会館）



◀日動画廊で長谷川智恵子同社専務からソ連を題材にした日本の画家たちの作品の説明を聞くＰ・デミチェフ

第5回ソ日事務レベル協議

　9月5日、6日の両日、東京で第5回ソ日事務レベル協議が開催され、双方は相互に関心のある問題について意見を交換した。



ソ日事務レベル協議の冒頭、あいさつを交わすカピツァ・ソ連外務次官（左）と梁井・日本外務審議官（写真提供＝共同通信）。

核実験のモラトリアムは軍縮への重要な一歩

アルメニア共和国科学アカデミー会員、3ヵ国核軍縮交渉ソ連代表団長
A・ペトロシャンツ

　核兵器実験の完全全面禁止は、軍拡競争制限・軍縮の分野と一連の核破局防止措置における最重要課題の一つである。この課題を緊急に解決する必要性については、多くの国際フォーラムや、国連、軍縮会議などのような権威ある機関の決議の中で述べられている。軍事的危険の増大と軍備強化の条件下で、核兵器実験の禁止に関する問題はとりわけ切実なものになっている。
　新型兵器を生産し、それを軍隊に装備するという問題を解決するにあたっては、兵器の実験は最も重要な、決定的な要素である。だが核兵器は、開発に際してだけでなく、長期備蓄の過程でも実験を必要とするという特殊性を持っている。核兵器実験の中止は、核兵器の一層の改良にとっても、その新型の開発・製造にとっても現実的な障害になるだろう。これは明らかだ。だからこそ、一九八五年8月6日から一方的にいかなる核実験をも中止するという、本年7月29日付のM・S・ゴルバチョフ声明で宣言されたソ連の決定は、世界でかくも広範な肯定的反響を呼び起こしたのである。M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長がタス通信特派員の質問に答えて指摘したように、世界はワシントンからも同じような態度を期待している。
　核実験制限の分野で、最初の協定になったのは周知のように、大気圏内、宇宙空間および水中における核兵器実験を禁止する一九六三年のモスクワ条約である。このいわゆる部分核停条約には一〇〇ヵ国以上が加入した。この条約の肯定的な成果の一つが、環境の放射能汚染の中止である。しかし条約は地下核実験を禁止せず、地下実験は核兵器の一層の改良のための手段として残った。
　モスクワ条約の発効後まもなく、一九六四年1月に発表されたソ連政府の覚書の中で、それ以前と同様に、今後は禁止に関する合意が地下核実験にも及ぼされるように行動する用意があることが表明された。しかしジュネーブ軍縮委員会での地下核実験の完全禁止に関する交渉は、西側諸国の態度のせいで行き詰まった。そこでソ連は最終目標——あらゆる環境での核爆発の禁止に一歩でも近づくなら、部分協定でもいいから結ぶ用意があることを表明した。その結果、一九七四年7月にソ米両国は地下核兵器実験制限条約に調印し、規模が一五〇キロトン以上の地下核実験を禁止した。一九七六年の条約によって、実験規模の限界は平和目的での核爆発の場合にも定められた。
　米ソ両国の代表団の意見によれば、この二つの協定の中で規定された管理措置体系は、核実験制限の目標に完全に一致するものだった。しかし米国のせいで、この二つの協定は今日まで効力を発生していない。
　一九七七年に国際世論の圧力を受けて米国は、核兵器実験の完全禁止に関する協定を作成するためにソ連と交渉することを余儀なくされた。この交渉には英国も加わった。
　筆者はソ連代表団長として3ヵ国（ソ連、米国、英国）交渉に参加したことがある。一九七八年5月にウォーンキ米代表団長は交渉の全体会議で、カーター大統領はこの交渉を特に重視しており、この交渉ができるかぎり促進されるよう切望している、と述べた。
　実際に、条約案の作成に関する交渉では極めて強い印象を与える進展が3ヵ国の代表団によって達成された。一九八〇年7月にこれらの代表団が軍縮委員会に提出した交渉の経過に関する報告書には、特に次のことが述べられていた。「交渉参加3ヵ国の代表は、恒久的条約を準備するうえで大きく前進したし、また、3ヵ国交渉は今後の前進のための最良の道である、とこれまで同様考えている」。そして当時、交渉における米国代表団長は「米国政府も共同報告書を承認したし、それを完全に、あらゆる保留条件なしに受け入れる」と述べた。交渉の十分に敏速

な、肯定的な結果を期待することができると思われた……

一九八〇年11月に交渉の第12ラウンドが終了した。この概して短い期間に、多くのことがなしとげられた。準備された草案によって、あらゆる場所、あらゆる環境での核弾頭のどんな爆発実験も禁止することが規定された。交渉の過程で条約の本文、平和目的の核爆発に関する議定書、地震データの国際交換の原則に関する議定書が合意を見た。管理の問題は原則的に解決されただけでなく、極めて詳細に解決された。自国の技術手段が管理の基礎となるべきだったし、地震データの国際交換と現地での不明な地震現象の現地査察がそれを補うだろう。

一九八〇年11月11日の最終全体会議で米国代表団長ヨーク大使は、米国側は「われわれが合意を達成したことに極めて満足している」と声明した。英国の代表エドモンズ大使も同じ趣旨の意見を述べた。

そのうちに米国では別の政権が権力の座に着き、核兵器の改良、近代化、新型核兵器の生産を中止する意向を完全に拒否した。

まさにこの時から米国の公式および非公式の代表は管理問題を積極的に利用し始め、ソ連が管理に反対であるかのように事態を描いている。

管理問題に対するソ連の態度を理解するためには、ソ連が一九八二年の第37回国連総会の審議に提出した文書「核兵器実験の完全全面禁止条約の基本条項」を読めば十分だろう。条項の基本部分はまさに査察問題を含んでいる。たとえば、条約の条項の順守に対する管理は各国の措置と国際的措置の結合の上に打ち立てられることが規定されている。各国の措置は、自国の管理技術手段の利用、この手段に基づいて得られたデータの他の条約加入国の処理への引き渡し、各国の管理技術手段を妨害しない義務を含めている。国際的措置はまず第一に、核爆発の最も有効な記録手段である地震データの交換を前提としている。通信システム、地震データ処理センターの設置なども規定された。地震データの交換を組織するために、各条約加入国の特別の専門家委員会を設置することが規定された。

国際管理措置として一九八二年の基本条項は現地査察を規定したし、しかも査察する人員の権利と機能のリスト、査察中の受け入れ側の役割を含む現地査察手続き、現地査察実施の規則を詳細に作成することが提案された。それどころか、任意の2国またはそれ以上の加入国が、管理の追加措置について話し合うことができるという規定を将来の条約に含めることが提案された。

西側の一部の政治家は、ソ連は管理に反対しているとしばしば主張しているが、決してそうではない。米国政府が一九八二年7月に一方的に核兵器実験禁止交渉の中止を宣言したのは、管理の効果が十分でないからでは決してない。ソ連に対する軍事的優位達成の願望、核軍拡競争の新ラウンドが、疑いなく米国にそう踏み切らせた決定的要因であった。

現在のワシントン政府は合意達成に向けての今後の具体的措置の代わりに、MXミサイル用の核弾頭、トライデント、ミゼットマン、長距離巡航ミサイル、パーシングⅡ型ミサイル、中性子兵器、新型戦略爆撃機B1用の弾薬、ステルスなどを開発する方針をとった。新型核兵器の開発は当然ながら、新たな集中的な実験を必要とし、従って一九八〇年の初めに現れた3カ国交渉での合意達成の現実的見通しは、ペンタゴンの戦略家たちを決して満足させなかった。

これについての米国政府高官の発言は極めて露骨である。彼らの意見によれば、核兵器実験の継続は核ポンピングを伴うX線ビーム――米大統領のいわゆる〝戦略防衛構想〟の重要な要素の一つ――の開発に、長期核戦争の遂行と関連したすべての要素の研究に、新型核弾頭の製造とすでに蓄積された保有核兵器の戦闘能力の点検に絶対に必要なのである。

米国のロスアラモス国立研究所のカー所長は下院外交委員会の会議で「核兵器の実験の禁止やモラトリアムは、米国の国家安全にとって否定的結果をもたらすかもしれない」と率直に述べた。さらに、「米国が核兵器に頼るかぎり、核兵器の実験が必要だ。なぜなら新型核兵器の作用の全過程を実験的にモデル化する方法はないからだ」。カー所長に言わせると、核実験の完全禁止に関する交渉と条約は、米国製核兵器の作用の信頼性に対する確信の喪失と米国の保有核兵器の望ましい近代化の中止をもたらす。

実を言えば、この点にこそ問題の本質があるのだ。米国は実験の中止を望んでいない。だからこそ米国の代表たちは何よりもまず〝一層効果的な〟管理の必要性を極力強調しているのである。すなわち、まず管理の〝本質〟、組織、方法について意見の一致を見て、それから核兵器実験の中止に移行するというのである。そのさい彼らは、そうすれば問題解決を長年にわたって引き延ばすことができるということをよく知っているのである。

国際連合創設40周年

国連は平和をつくる道具

――ソ連国連常駐代表オレグ・トロヤノフスキーに聞く



国連の演壇で演説するトロヤノフスキー・ソ連国連常駐代表

オレグ・トロヤノフスキーがソ連の国連常駐代表としての信任状をK・ワルトハイム国連事務総長（当時）に提出したのは、一九七七年1月6日のことであった。

トロヤノフスキーは一九一九年モスクワ生まれ、モスクワ哲学・文学・歴史大学に学び、そのあとモスクワ外国語大学を卒業した。第2次世界大戦中は軍隊に入り、またタス通信社、ソビエト情報局を経て、戦後一九四六年からソ連外務省に入った。一九五三年から五八年までソ連外務大臣補佐官、そのあと9年間ソ連閣僚会議議長（首相）補佐官であった。一九六七年から七六年まで駐日大使を勤めた。国際問題に関する論文などが多い。ソ連の最高の勲章であるレーニン勲章を2回受けた。

――あなたは後年8年間も国連で仕事をすることになった訳ですが、その国連のことを初めて聞いたのは、いつか？

ソビエト情報局でジャーナリストとして働いていた頃の一九四三年10月モスクワでソ米英三国外相会議があって、そのとき発表されたコミュニケのなかに国連をつくるという考えが述べられているのを知ったのが最初だ。このときの外相会議で国連の創設作業を始めるとの最初の決定が採択された。外相会議の特別声明は、「できるだけ短期間に、すべての平和愛好諸国家の主権が平等であるとの原則に立った、世界平和と安全を維持するための普遍的な国際組織をつくる必要のあること、平和愛好国は大国も小国もすべてそのメンバーになれること」を認めたものであった。

その次の年、ソ米英三大国の代表がダンバートン・オックス（米国）で国連憲章の作成に関する交渉を行った。国連憲章は一九四五年4月25日に開かれたサンフランシスコ会議で採択された。この日はエルベ川でソビエト軍部隊と米軍部隊が出会った歴史的な日であった。

ことしは第2次世界大戦戦勝40周年記念日と国連創設40周年記念日が巡ってきたが、そもそもこの二つの記念日には直接の結びつきがある。国連こそ、社会制度、政治体制の違いを乗り越えて、共通の敵に打ち勝ち、戦後の世界を再建するために協力して成果をあげた諸大国の反ヒトラー連合の勝利と努力が生んだ産物であった。

国連憲章のなかには当時の

特徴をなすものが多く取り入れられた。その第一は、社会制度の違う国々が協力するという点だ。また各国の主権の平等、民族の自由と自決、軍縮、国際関係における力の不行使、内政不干渉などの公正で民主的な原則が国連憲章のなかに体現された。サンフランシスコ会議の最終会議でソ連代表団のアンドレイ・グロムイコ首席代表は、「こんどの大戦で数知れない犠牲を出した世界の平和愛好諸国民は、人類にとって新しい悲劇の再発を防止する力のある、このような国際機構を集団の努力で創設することに、当然のことながら、大きな期待をかけている」と指摘したのであった。この言葉のなかには、人類の歴史で最も大きく、最も立派な国際機構である国連の根本的使命に関する考え方が反映されていた。40年前国連の創設に当たった国は51カ国だったが、現在の加盟国は一五九、事実上全人類が国連に代表を送っていることになる。

——あなたはたまたまいろいろな時点で国連の活動を見守り、分析することになったわけだが、国連の草創期、たとえば最初の10年間に特徴的だったことは？

私が初めて国連総会の会議に出たのは一九四六年の秋の、第1会期の後半だった。そのあと米国にきて国連に出席したのは、一九四九年、五〇年、五五年（このときはサンフランシスコで国連創設10周年記念総会があった）、五五年、五七年、六〇年だ。

残念なことだが、戦後間もなく国連内の事情は激変してしまった。国連加盟国、とくに安全保障理事国の協力関係がなくなり、その代わりに激烈な外交戦の舞台となった。

米国の代表団はバルーク案なるものを国連に持ちこんだ。バルーク案のねらいが米国の原爆独占を永久化することにあったのは明らかだった。米国代表団はソ連の原子兵器禁止案に執拗な妨害を加え、軍縮交渉を挫折させた。

当時西側は国連で圧倒的多数を占め、その頃の言い方によると、"投票マシン"を手中に握っていた。このマシンを使って、国連の権威に重大な損害を与え、国連憲章の予定した国際安全保障体制を攪乱するいろいろな決議が通ったのであった。

また安保理常任理事国の全会一致制という根本原則に異議を唱えはじめ、拒否権は無益なものだと断じて、安保理事会の重要性をみくびり、ことあるごとに国連総会の重要性を宣伝する声が出たのも、この頃であった。

総会では多くの決議案が採択されるが、ご存じのように、その決議は必ず実行されるとは限らない。国連憲章に従えば、勧告の性格をもつにすぎない。一方、安保理事会の決議は拘束力を持っているが、その数は大したものではない。一言でいうと、その頃の国連は主として宣伝演説をぶつ場所として利用されていた。こういう状態が五〇年代の末から六〇年代の初め頃まで続き、六〇年代から国連は新時代に入った。

——その新時代というのは、植民地的従属から脱した国を第一として多数の国が新加入して国連が大きくなったことに関係があったと思う。新規加盟国である発展途上国の国連内の立場はどんなものだったのか？

発展途上国は多くの問題について当然社会主義諸国の同盟者になった。なにしろ、民族自決権の規定が国連憲章に挿入されたのはソ連が強く要求したのだから。それに、一九六〇年に国連が植民地諸国とその民族を独立させるとの宣言を採択したのは、ソ連代表団の提唱によるもので、この国連宣言のおかげで民族解放運動は大きな刺激を受け、植民地の解体過程がいちじるしく速まり、解放運動があまり流血沙汰や破壊行為を伴うものでなくなった。新生諸国はさらに経済的独立を求め世界の新しい経済秩序を打ち建てるための闘争を進める上で社会主義諸国からの支援を当てにできることとなった。

新しい独立国家が続出したために国連加盟国の膨張ぶりはすさまじいものであった。国連創設時の加盟国のなかでアフリカの国はわずか4カ国、アジアは8カ国だけだった。現在前者は51、後者は40になっている。こんにち安保理事会、総会の仕事のなかでも目立ったものは、中東、中米、アフリカ南部などにおける紛争と軍事的危険の根源を除くことに関係した問題だ。一例を挙げれば、中東情勢の調整に関しては国連は当事国が全部参加する国際会議の招集を強く要求している、中米問題ではコンタドーラ諸国の提案による平和的紛争解決方式の探求を国連は支持している。またアフリカ南部の問題については国連は人種差別政策をとっている南アフリカ共和国への経済制裁の実施を主張している。まだ例を挙げようとすれば、いくらでもある。

——国連の主要な課題である平和と国際安全の維持ということに触れることにするが、この問題で国連はどんな役割を果たしたか、またソ連はどんな貢献をしたか？

40年という国連の歴史のなかで、揺るがぬ平和と普遍的な安全を達成するという大道、軍縮という大道を国連が踏み外したことは一度もない。

一九四六年10月の総会には私も出ていたが、ソ連代表団はこの総会に、原子力の軍事目的での生産・使用の禁止を含む軍備の全般的削減・規制案を提出した。そして、その後幾年かのあいだ軍事的脅威の低減・軍縮についてソ連が行った多くの提案が国連の関

心の中心となった。これらのソ連案は、戦争、なかんずく核戦争の防止、軍拡のために闘う広範囲の問題を検討するたたき台となったし、それは現在でも変わらない。これらのソ連案は国連で広く支持された。そのなかには、核戦争の弾劾と核破局の防止に関する宣言、国際関係における武力の不行使および核兵器の永久禁止に関する提案、新しい種類とシステムの大量殺りく兵器の研究開発・製造の禁止に関する提案、そのほかにもたくさんある。

一九七六年の第31回国連総会に提出して審議を求めたソ連の覚書には、核軍拡競争の停止、核兵器の廃絶への移行、核兵器の実験禁止、核兵器の拡散防止制度の強化など、ソ連のいろいろな提案が具体的に盛りこまれており、通常兵力と通常軍備を制限・縮小する必要が同時に強調されている。また有望なアプローチの一つとして、各国の軍事予算を削減して、それで浮いた金を発展途上国援助へ振り向けるという提案が提出された。

ソ連は国連軍縮特別総会にいくつかのきわめて重要な提案を出し、その多くは採択されたか、または総会が決議を採択する場合の土台となった。ソ連が一九八二年6月に宣言した、最初に原子兵器を使用しないという一方的な義務は、きわめて重要な一歩と評価された。

もうひとつ、宇宙空間を平和目的にのみ、人類の福祉のためにのみ役立てようというソ連の非常に重要な提案も挙げておきたい。

第39回総会の出席国から支持されたこの提案を発展させて、ソ連はことしの8月中旬に「非軍事化の条件下での宇宙空間の平和的開発における国際協力について」の問題を第40回総会の議題に入れるよう提案した。

——前回の総会の内容を少し話していただきたい。あの第39回総会は多くの点で、緊迫した世界情勢を、地球の将来に対する各国民の増大した不安を反映していた。

第39回国連総会はいろいろな観点の核戦争防止に関する決議案を27も採択した。この総会で非常に活発な役割を果たしたのはソ連とそのほかの社会主義諸国、それに発展途上諸国だった。第39回総会の作業のなかから、もう一つソ連の発議で上程され、総会で可決された「国家テロリズム政策および他の主権国家の社会・政治体制の破壊をめざすあらゆる国家行動の不容認について」の提案をとくに取り上げたい。この提案は一一七カ国から支持され、国連ではじめて、国家によるテロ行為を容認しないという原則が宣言された。

核戦争の防止に関する27の決議案についてだが、その投票の内訳はこの問題に対するソ米二大国の姿勢を明快に説明している。ソ連は決議案に賛成が22回、反対が1回、棄権が3回だが、米国は賛成はわずか3回だけ、反対が実に17回、棄権が6回となっている。

宇宙の軍事化防止に関する決議案の投票内容はもっと雄弁に米国の姿勢を物語っている。一五〇カ国の代表がこの決議案に賛成投票し、ただ一国、米国のみがこの決議案に賛成しなかった。一五〇対一という数字はたいへん意味深長だ。

——過去40年を通じてソ連の国連に対する立場はどうだったか？

ソ連が国連を理想的なものと考えたことは一度もない。常に国連の可能性には一定の限界があるとみてきたが、人類にとっての国連の有用性、必要性を疑ったことは一度もない。われわれは国連と、現代の最も切実な問題の解決を目的とするその活動を常に尊敬してきたし、尊敬するだけでなく力を貸してきた。

ソ連は、M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長がいつも強調してきたように、「国際的紛争問題を力で解決することには断固反対するものとして、平和の効果的な道具としての国連を常に重視してきたし、現在も重視しており、40年前国連創設の基本精神となった公正で民主的な諸原則が実際の国際関係のなかでしっかり確立するために、新たな行動をとる用意がある」。

——ソ連では国連の創設40周年をどのようにして記念するのか？

国連総会の勧告に従って国連年、国際平和年行事実行委員会がわが国にできた。この行事をソ連がどれくらい重視しているかは、この委員会の顔ぶれを見ればすぐわかる。委員長は一九四五年のサンフランシスコ会議でソ連を代表して国連憲章に署名したソ連共産党中央委政治局員でソ連最高会議幹部会議長のA・A・グロムイコで、党中央委書記のM・V・ジミャーニンが副委員長に任命されている。そのほか、党の指導者、指導的政治家、大臣、大きな社会団体の指導者たちが委員になっている。

ソ連の世論を代表する人たちの会合、学術フォーラム、会議などの行事がこれまで行われてきたし、これからも行われることになっている。国連と、一九四五—八五年の間の平和・軍縮・協力闘争とを題材とした映画、ラジオ・テレビ番組が製作され、本やパンフレットが出版されることになっている。また国連40周年や国連の活動に対するソ連の貢献をテーマとした展覧会、講演、座談会が行われることになっている。さらにまた、国連主催の国連年・国際平和年記念行事にもソ連の代表が参加することになっている。

承認番号Ｕ85Ｍ―5330

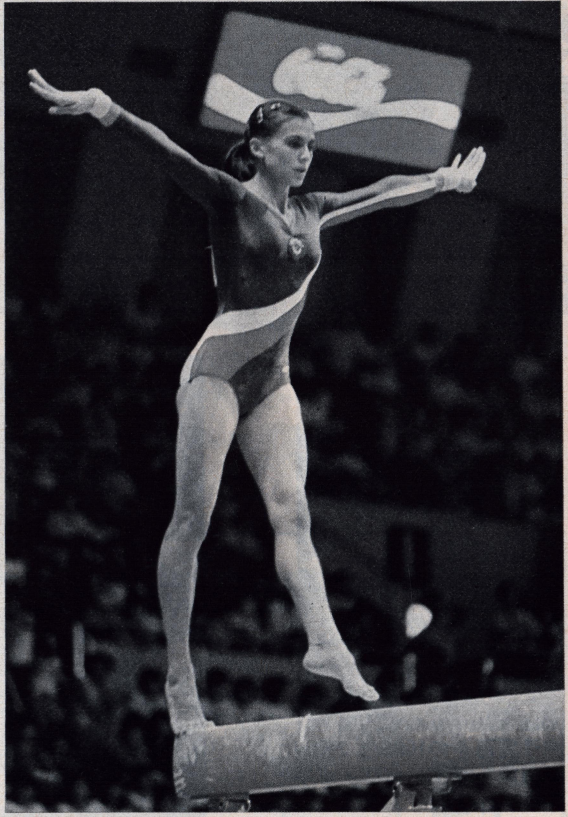
ユニバーシアード神戸大会を振り返って

ミハイル・エリセイキン・ソ連学生スポーツ協会〝プレベスニク〟会長に聞く



ソ連選手団の入場行進


体操は男女ともソ連チームが団体優勝


女子体操で個人総合優勝のナタリア・ユルチェンコ


男子体操で個人総合優勝など６個の金メダルを獲得したドミトリー・ビロゼルチェフ

8月24日から神戸で開かれていた国際学生スポーツ大会――ユニバーシアード85が9月4日閉幕した。この大会の成果とソ連選手団の活躍について、本誌のアレクサンドル・クラーズ記者とアンドレイ・スロベスヌイ記者がソ連学生スポーツ協会〝プレベスニク〟のミハイル・エリセイキン会長にインタビューした。

ユニバーシアード神戸大会は疑いもなく世界学生スポーツの発展における新しい段階を開いた。オリンピック大会とオリンピック大会の間に開催されるこの競技会は、参加層の広さと規模の大きさでオリンピック大会に次ぐものである。だが、神戸で開かれた今回の大会はさらに記録的なものとなった。大会史上初めて一〇〇カ国余から四〇〇〇人以上の選手が参加した。

神戸大会でソ連選手団は、他の参加諸国を大きく上回る84個のメダル（金44、銀21、銅19）を獲得した。たとえば金メダルは、メダル獲得数で2位の米国の金メダル数のちょうど2倍である。とはいえ、これはソ連選手団にとっては新記録ではない。前回のエドモントン大会（一九八三年、カナダ）では金59、銀29、銅27の計一一五個のメダルを獲得した。それでは、今回はソ連選手団は弱かったのだろうか？ そうではないと思う。主な理由は、圧倒的多数の国々が以前よりもユニバーシアード大会を重視するようになり、競争が以前よりも激しくなったからだ。米国は最強の水泳選手をほとんど総動員し、バスケットボールの非常に強いチーム、すぐれた陸上選手を神戸大会に送ってきた。

だが、もちろん、ソ連選手団はある程度の成功を収めたと同時に、いくつかの問題を抱えていることも露呈した。たとえば、ソ連選手が振るわなかった唯一の分野――水泳では、５つの金メダルしか取れなかった。

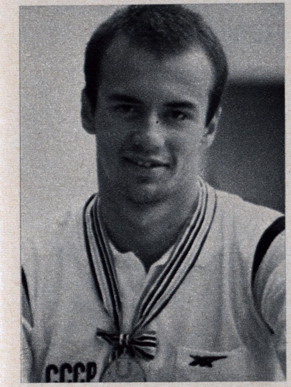
優勝候補に挙げられていながら決勝で日本に敗れた男子バレーボールを除けば、他のすべての種目でソ連の選手は善戦し、自己の記録を伸ばした。

具体的な例を挙げよう。たとえば陸上競技だが、走り高跳びでイーゴリ・パクリンが出した世界新記録２ｍ41は、私にとっても、また多くの

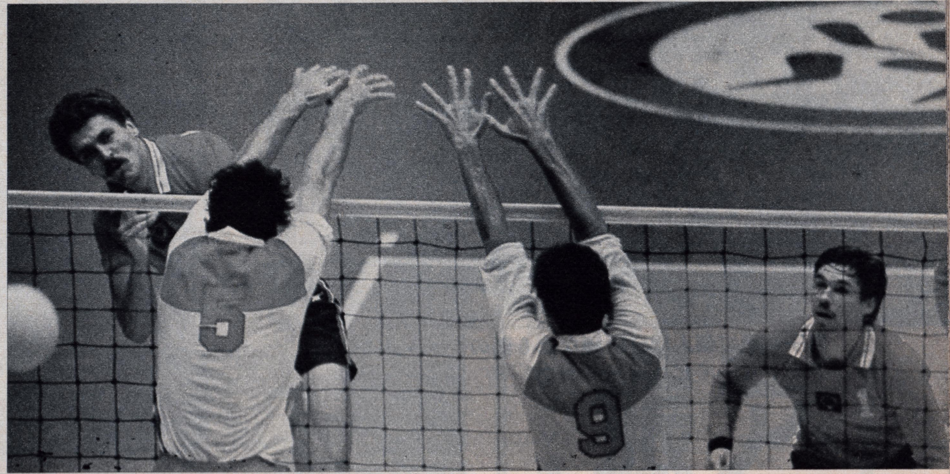


バスケットボールも男女ともソ連チームが優勝した。

男子バレーボールの優勝候補ソ連チームは日本に敗れ、銀メダルに終わった。



男子背泳ぎの100ｍと200ｍで優勝したイーゴリ・ポリャンスキー



人々にとっても、うれしいハプニングだった。女子100ｍ走のイリーナ・スリューサリは世界記録には及ばなかった（11秒22）が、この種目での優勝は、このところずっと不振だったソ連の短距離選手たちにいい刺激になったはずだ。

体操は伝統的にソ連が得意とする種目だが、神戸大会でもそのことが実証された。男子も女子も団体優勝に輝き、個人総合でもドミトリー・ビロゼルチェフとナタリア・ユルチェンコがそれぞれ優勝した。ついでながら、ビロゼルチェフは種目別でも4種目を制し、団体、個人総合と合わせて一人で6つの金メダルを獲得した。

テニスの5種目のうちソ連選手が4種目で優勝したのもハプニングだ。女子シングルスのラリサ・サブチェンコ、女子ダブルスのサブチェンコとスベトラナ・パルホメンコ、男子シングルスのアレクサンドル・ズベレフ、男子ダブルスのズベレフとセルゲイ・レオニュクがそれである。

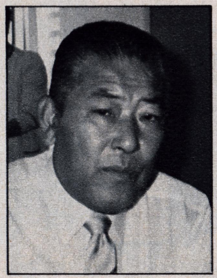
多くの種目でのソ連選手の活躍は順当なものと言えよう。たとえば、バスケットボールと水球は、ソ連ナショナルチームは世界チャンピオンのタイトルを持っているが、チームの主力は学生だ。もっとも、この種目が強い他の国々も事情は似たりよったりなので、優勝は決して楽ではなかった。水球はユーゴスラビアと激戦の末、やっと金メダルを獲得した。バスケットボール男子は米国と競り合って、タイムアップ寸前にシュートを決めて勝つという劇的なものだった。

ソ連選手団についてもう一つ。それは、これらの選手がわが国の49の大学を代表しているということだ。彼らが住んでいる都市も、モスクワ、レニングラード、キエフ、リガ、カウナス、ノボシビルスク、ブリャンスク、ゴリ、レーニンスク・クズネツキー、クラスノヤルスク、ウファ、バクーその他、全国に及んでいる。ソ連の学生スポーツがこのように広範囲にわたって発達していることが、ユニバーシアード大会での成功の理由になっている。



サインを求められるソ連選手

日本ユニバーシアード委員会委員長古橋廣之進氏に聞く



ユニバーシアード神戸大会は間違いなく今年最大のスポーツイベントで、日本のみならず全世界のスポーツの発展において確かなワンステップになるでしょう。

しかも今年は国際青年年にあたります。われわれ組織者はこの神戸大会に、ソ連選手をはじめ過去の大会に比べると記録的な数の選手が集まったことに大変満足しています。これは諸国民の触れ合いの拡大、平和の強化にとって重要な意義を持つでしょう。

残念ながら、さまざまの問題によって日ソ両国の選手はモスクワのオリンピックでも、ロサンゼルスのオリンピックでも顔を合わせられませんでした。スポーツは政治の道具であってはならないとわれわれは考えているので、神戸には北からも南からも、西からも東からも、出来る限り多くの青年がやって来られるよう八方手を尽くし、ユニバーシアード神戸大会が友好のユニバーシアードになるよう努力しました。

催し物のお知らせ

☆ロシア共和国・アンサンブル“スベニール”

伊東市観光会館（10月19日）、横浜県立音楽堂（10月20日）、旭川市公会堂（10月22日）、札幌市民会館（10月23日）、北見市民会館（10月24日）、遠軽町福祉センター（10月25日）、網走市民会館（10月26日）、津別中央公民館（10月27日）、岩手県教育会館（10月29日）、平市民会館（10月30日）

▽お問い合わせは、日ソ親善協会（電話03・261・4897）へ。

☆ミハイル・プレトニョフ・ピアノコンサート

東京文化会館（10月22日）、伊那市民会館（10月25日）、刈谷市民会館（10月26日）、大阪・シンフォニー・ホール（10月28日）、東京・昭和女子大学人見記念講堂（10月30日）、東京・新宿文化センター（10月31日）、松本・松本音楽文化ホール（11月1日）、東京文化会館（11月7日）、浦和・埼玉会館（11月8日）

▽お問い合わせはジャパン・アーツ（電話03・235・1661）へ。

☆ソ連国立室内オーケストラ

松本市音楽文化ホール（10月29日）、佐倉市民音楽ホール（10月30日）、酒田市総合文化センター（11月1日）、秋田・秋田県児童会館（11月2日）、大阪・ザ・シンフォニーホール（11月5日）、京都・京都会館第2ホール（11月6日）、東京・中央会館（11月8日）

▽お問い合わせは、日ソ協会（電話03・429・8231）へ。

☆第17回全道ロシア語弁論大会

▽11月9日（土）　午前10時より（Aクラス・作文テスト）午後1時より（A・Bクラス・弁論大会）

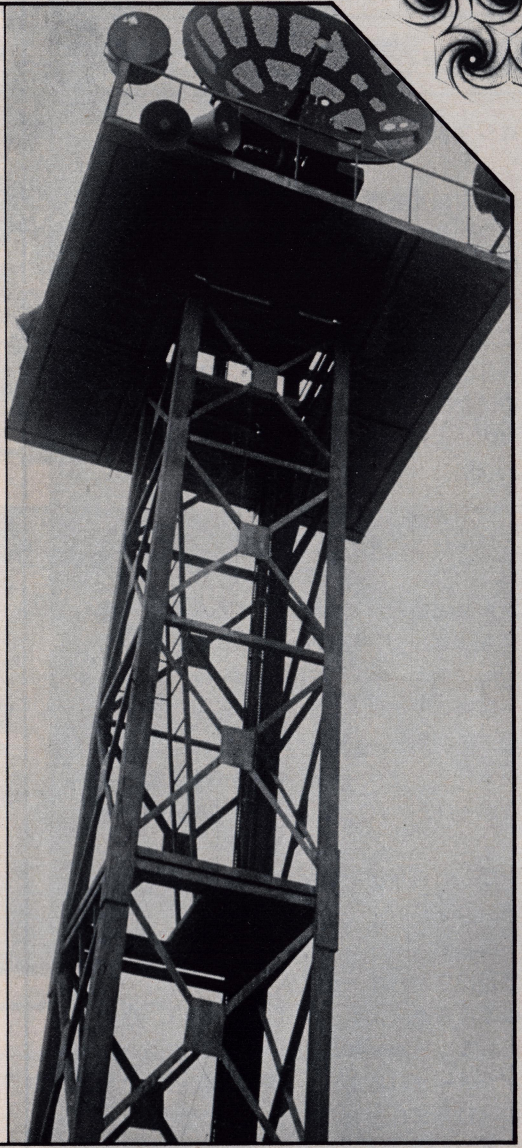
▽札幌婦人文化センター第2研修室

▽申し込み締め切り：10月31日／参加費：各クラスとも1,000円。

▽申し込み・問い合わせ先：日ソ協会北海道連合会（電話011・631・2503）

話題を拾う

救難衛星の受信所



ウラジオストクにソ連で3番目（ムルマンスク、アルハンゲリスクに次いで）の国際救難衛星システム「コスパス＝サルサット」の受信所が建設された。遭難した船舶や航空機の位置を確定するためのこの衛星システムは、ソ連海運省、米国航空宇宙局、カナダ通信省、フランス宇宙研究センターが共同開発したもので、これらの国のほか英国とノルウェーが参加しており、フィンランド、日本、ブルガリア、ブラジル、オーストラリア、その他の国の加盟も予定されている。

現在、このシステムでは米国1個、ソ連3個の低軌道衛星が飛行しているが、これまで「コスパス＝サルサット」システムのおかげで世界中で約五〇〇人が救助された。ウラジオストクの新しい受信所の開設により、ラジオブイを装備した船や航空機が太平洋水域、極東地方で遭難した場合の捜索・救助活動が敏速に出来るようになる。写真はそのアンテナと受信室。



女子教育大学

ことしもまた、ソ連アジア部の共和国の一つ、カザフ共和国の首都アルマアタにあるカザフ女子教育大学を卒業したばかりの六〇〇人を超すほやほやの教師たちが9月の新学年から教壇に立った。

40年以上も前、カザフ人の女性を教員に養成し、カザフスタンの女子教育をさらに発展させるために女子教育大学がアルマアタに設立された。この大学の特徴は、学生のほとんどが農村の中等学校の卒業生で、教員の資格を取ったあとは農村へ帰ってゆくということ。現在、この大学の七つの学部には四五〇〇人の女子学生が学んでいる。

カザフ女子教育大学にはいま3棟の校舎、6棟の学生寮、二つの食堂、学生診療所、体育館（複数）などがあり、28の講座で二九五人の教師が授業を行っている。その多くはこの大学の卒業生である。写真はことしこの大学の文学部を卒業した人たち。



タタールの祭り



6月の末にタタール自治共和国（ロシア連邦共和国欧州部の東部）を訪れた人は、ボルガ沿岸に住むタタール人たちが昔からの伝統を守って開く華やかな農業の祭〝サバントゥイ〟に出くわすことになる。この祭りは春の農繁期が終わり、草刈りを前に忙しいコルホーズの仕事が一段落した夏の初めに行われる。祭りの中心は競技やゲームと余興。

〝サバントゥイ〟でいつも最高の人気を集めるのは民族格闘技。この競技の優勝者は祭りの覇者として人々の大きな尊敬を集める。写真はブレジネフ市の〝サバントゥイ〟の覇者、カマ自動車工場の仕上げ工R・シャリポフ。賞品の羊をかついで場内を一周する。

ラトビアの名外科医

ラトビア共和国（バルト海沿岸）の首都リガの外科医ビクトル・カルンベルズは、彼が治した人たちから〝魔法使いのドクター〟と呼ばれているが、これは決して誇張ではない。〝絶望〟と見られていた人たちを含めて数百人の患者を、文字どおり再起させたからである。

ソ連医学アカデミー準会員のカルンベルズ教授が所長をしているラトビア外傷学・整形外科学研究所では手足の多発性骨折患者を治療しているが、ここでの治療に大きな効果を上げているのが教授の考案した装置。この装置の原理は、本誌でも紹介し、つくばの科学万博でも展示されたイリザロフ教授考案の装置に似ている。カルンベルズ教授の装置でも、損傷した解剖学的構造を急速かつ確実に回復させ、骨の破片を一つにつなぐことが出来る。また、この装置は四肢の先天性変形の矯正、たとえば、骨の移植切片を使って四肢の伸長をすることも出来る。カルンベルズ教授の装置はソ連国内の病院で使われて効果を上げており、外国にも輸出されている。写真は患者を診察するカルンベルズ教授（右）。患者の腕に装着されているのが教授の考案した装置。



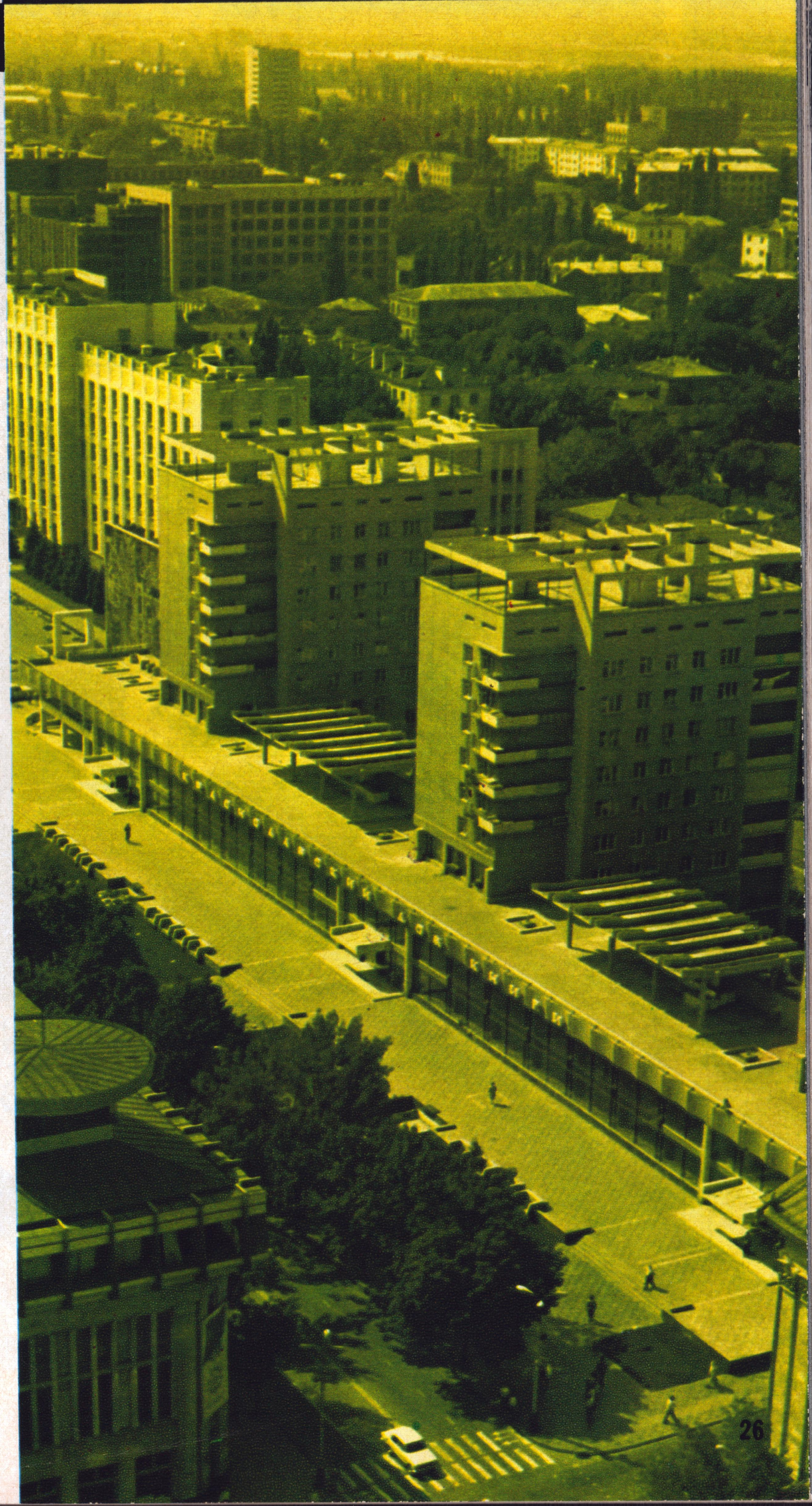
ロシア南部の大都市

クラスノダルの再開発

クラスノダル市執行
委員会議長（市長）
ユーリー・リトビネンコ
カメラ
Y・ペトシャコフスキー



サーカス場



クラスノダルの中心部



クラスノダルでは住宅建設が急ピッチで進んでいる。



クラスノダルのゴーリキー公園

クラスノダル（人口六〇万九〇〇〇人）はロシア南部の最も美しい都市の一つで、穀倉地帯と観光保養地帯の中心地でもある。北カフカズのクバン川右岸に約二〇〇年前に生まれたこのまちは、かつてロシアの女帝にちなんでエカテリノダルと呼ばれていた。まちは経済・地理的にまたとない有利な場所にあったため、かなり急速に（だが、いささか無秩序に）発展した。とはいえ、一九一七年の10月社会主義革命までは、建物のほとんどは平屋の農家だったので、大きな"村"と呼ばれていた。革命後20年ほどの間に、人口は3倍に増えた。工業企業と数階建てのビルもいくつか出現した。

第2次世界大戦中、カフカズ地方から退却するファシスト・ドイツ軍は、少しでも目につく建物はすべて爆破した。数万人の市民が住む家を失った。人々が住む家もない条件のもとで市の復興が行われ、破壊を免れた家はそれがどんなひどい家でも大切に維持された。

だが、年月がたつと、かつては家もまばらだった周辺部に現代的な高層ビル群が立ち並び、逆に都心部の方が、2階建てばかりが立ち並ぶ古くさい町並みになってしまった。市当局が都心部の再開発に着手することができるようになったのは、比較的最近のこ



定期市で



18世紀の建築記念物エカテリニンスキー寺院の修復作業



とである。するとこんどは、市がクバン川沿いに余りにも延びすぎていること、市が、市の彩りになる川に背を向けて発展してきたことがクローズアップされてきた。



ゴーリキー記念ドラマ劇場



緑に埋もれる辻公園



〝クバン〟スタジアム

市民の意見や要求をもとに

近い将来のクラスノダルのあるべき姿について、地方紙「ソビエツカヤ・クバン」の紙上で討論が展開された。そのさい、クラスノダル市民と市当局の間のフィードバック・システムは一朝一夕にでき上がったのではない、ということを言っておかなければならない。市民は選挙期間中だけでなく、いつでも市ソビエトの代議員に要望を出す。市民の意見や提案は、有権者に対する市ソビエト執行委員会の定期的な報告のさい、記録され、総括される。紙上討論は市の再開発問題をより広い視野で見ることを可能にした。当面の細かい問題を解決するにあたって、われわれがしばしば全体的な展望を見落としがちなのも事実だ。

討論にはさまざまな年齢の人々――労働者、職員、文化活動家、年金生活者、学者、学生が参加した。もちろんわれわれは、すべての提案を取り上げることができたわけではない。一方の意見はしばしば他方の意見を排斥していたという理由もある。とはいえ、すべての意見は検討され、何らかの形で市ソビエト執行委員会が採択した決定に影響を与えている。

代議員たちは何よりもまず市ソビエト執行委員会建築計画局の仕事を検討し、市の建築主任の報告は市ソビエトの定期総会で聴取された。

新聞紙上で行われた討論はまだ盛んにつづいていたが、市ソビエト執行委員会はすでに、編集局への投書の中で最も多い提案に関して措置を講じていた。それは何よりもまず、いわゆる〝小形式の建築〟に関するものだった。市内の公共交通機関の停留所わきの古い建物に代わって、数百の近代的な新聞スタンド、売店、喫茶店が生まれた。ポスター掲示板さえもが一種の装飾になった。このようにわれわれは、特別な費用を支出しなくても、かなり短期間に、市内の景観をもっと魅力的なものにすることができると市民が考えているのは正しい、と改めて確信した。

わが市へ初めてやって来た人は、緑のトンネルを思わせるメーンストリートのクラスナヤ通りを歩いたり、古い住宅を見たりすると、しばしば自分がいるのはソ連で最も緑の多い都市の一つだという結論に達するようだ。だが、必ずしもそうではない。新しい地区にはまだ樹木や植え込みが少ないからだ。うっそうたる緑はない。いまのところ緑地面積は、クラスノダル市民1人当たり15平方m以下である。毎年約80haの植樹が行われている。だが、市民はそのようなテンポには満足していない。そこで市ソビエトは、大工業企業の資金を導入して〝緑化〟計画を拡充しているところだ。

市の現状と向こう15年

紙上討論の参加者は、市には独創的な建物が少ないと発言している。独創的な建物こそが市の独自の景観を作り出すというわけだ。もちろん、それは正しい。戦後しばらくは、やむを得ず、最も安価で速く実現できる設計での建設をめざさなければならなかった。いまは状況がちがう。

クラスノダル再開発のマスタープランが研究され、確立すると、市ソビエトの代議員と専門家はこの方向で一定の方策を予定した。こうして、すでに独創的な設計の建物が出現している。たとえば、書籍会館、〝インツーリスト〟ホテル、その他いくつかの研究所などがそれだ。新しい決定にもとづいて、市ソビエトは近いうちに、才能ある建築家たちの設計による建物で景観を飾るだろう。都心部の再開発は、市が川に向かって展開するようにという提案を考慮して進められている。すでに河岸通りが建設中で、それに沿って広い並木道も作られる。川岸には緑地つきのスポーツ・健康増進施設も作られる。メーンストリートのクラスナヤ通りも拡幅中で、堂々とした建物が配置される。行く行くはクラスナヤ通りへの自動車の乗り入れを禁止して、河岸並木道につながるいくつかの通りと同じく、歩行者専用にしようと考えている。

市は近いうちにクバン川左岸にまで進出するだろう。だが、それによっても市民に近代的な住宅を保障するという問題は完全には解決されない。住宅建設は急ピッチで進められているのだが、人口増加がそれを上回っている。

われわれはクラスノダルの人口が二〇〇〇年までには九〇万人になるだろうと予想している。われわれが、住宅に適したあらゆる土地、特に古い建物が取り壊されている場所で、住宅建設の規模を大幅に広げるあらゆる可能な方法を探求しているのはそのためだ。向こう15年間に一〇万戸以上の快適なフラットを市民に提供しようとわれわれは計画している。

市を将来どう美しく快適にするかはすべての市民の関心の的である。この市民の関心の高さが、われわれの計画は必ず実現するだろうという期待を抱かせてくれる。

ソ連の視点

アジアの強固な安全は、幅広い基盤に立ってこそ可能

ノーボスチ通信政治評論員
エドゥアルド・リャプツェフ

ソ連の指導部はアジアを平和と安定の地域にするために、ねばり強い努力を重ねている。8月29日クレムリンで開かれたモンゴル人民共和国の指導者ジャンビン・バトムンフの歓迎夕食会で、ミハイル・ゴルバチョフが述べたように、「アジアの諸国民は死活の利益が共通することによって一つに結ばれており、過去が生み出した問題や未来をめざす道で直面している課題など、多くの点で似通った問題を解決している」。アジアの大きなグループの国々の利益がこのように合致していることは、これらの国々の間の協力と善隣の必要性をうながしている、とミハイル・ゴルバチョフは述べている。

モスクワは、アジアのすべての国々およびアジアの個々の国の利益に合致するような幅広い安全構想を基盤にすれば、アジア諸国の協力・善隣関係は可能であると見ている。ミハイル・ゴルバチョフが指摘したように、このような安全構想は、かつてアジア諸国が作成した平和共存5原則、一九五五年にアジア・アフリカの29カ国が承認したバンドンの10原則などを包括することができるだろう。周知のように、これらの原則には、主権の不可侵、領土保全、他国の内政への干渉の不容認に関する重要な条項、武力行使の拒否、あらゆる係争問題の平和的解決、国際義務と国連憲章の尊重が含まれている。

アジアの集団安保体制をつくる発起点となるこの基盤には、ミハイル・ゴルバチョフが考えているように、アジア地域の安全保障問題に関するソ連、モンゴル人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国、インドシナ諸国、インドその他の地域諸国の一連の提案も含まれる。またソ連は何よりもまずアジア地域諸国の肯定的イニシアチブに最大限に依拠し、この地域の平和と安定の達成に努めている。このことは、8月のカイソン・ポムビハン・ラオス首相の訪ソの成果に関するソ連・ラオス共同声明が証明している。この声明は第11回インドシナ外相会議で出された東南アジアの情勢の正常化に関する現実主義的なイニシアチブを歓迎している。

ソ連の指導部の信念によると、アジア集団安保体制創設のこれらすべての諸原則は、アジア地域のあらゆる国によって必ず発展、補足されねばならないし、またそれは可能である。ソ連は、こうした建物の土台が広がれば広がるほど、建物は頑丈になると見ている。われわれが見るところでは、ソ連のアジア政策のこうした路線は、アジアという広大な地域を軍拡競争の巨大な渦に引き込んでいる米国指導部の路線と実質的に異なっている。この米国の路線は疑惑を深め、戦争勃発の恐れのある最大の危険地点での不信と緊張を強め、アジアでの軍事対決を激化するのがおちである。だからモスクワが協力と善隣のプログラムを掲げ、アジアの恒久平和と安定に努めているとき、たとえば一九七五年のヘルシンキ全欧会議の準備のときのように、この方向で米国と共同で行動するのにやぶさかでない。

核兵器を自国の領土内に保有していない国々はもちろん、他の国々に核兵器を先制使用しない義務を負うというソ連のイニシアチブは、現在アジアの安全の強化に役立っている。南太平洋の国々は、南太平洋を非核地帯とすることに決定したが、モスクワはこの決定を支持した。8月6日から年内いっぱいすべての核実験のモラトリアムを実施し、もし米国がソ連の措置に追随すればさらに延長するというソ連の決定は、ソ連の指導部がアジアの安全の強化やアジアでの大国の核実験の中止に役立とうと望んでいることを物語っている。

ミハイル・ゴルバチョフが指摘したように、疑いもなくアジア安保構想の作成と実現は長期的課題である。これを実現するには簡単な問題の解決からより複雑な問題の解決に向かう必要がある。その過程の節目になりうるのは、インドシナ半島および南北朝鮮間の情勢の正常化、個々の国または国家グループ間の信頼の強化である。モスクワはアジアの平和と安全に対する真の配慮がこもったどんな提案にも、理解をもって対処してゆくと述べたミハイル・ゴルバチョフの言葉は、この面で協力する用意がソ連にあることを物語っている。いま時は、アジアの平和と安定の強化に対するこうした建設的な態度を強く求めている。

核兵器禁止をめざす行動週間

ベロルシア共和国首都ミンスクの反戦集会に参加した第2次世界大戦に参戦した婦人たち



広島、長崎の犠牲者をきちんと追悼するということは、とりも直さず、米国の原爆の犠牲になった広島、長崎市民の悲劇をこの地球のどこかで二度と繰り返さないために全力を尽くすことである――これがソ連の立場だ。そしてこの立場は、広島・長崎被爆40周年に当たり8月6日から13日まで世界平和評議会の呼びかけで行われた「核兵器禁止と広島・長崎被爆者との連帯のための行動週間」のとき、改めて確認された。

「ノーモア・ヒロシマ!」、「核軍拡競争に歯どめをかけろ!」、「核兵器を禁止・廃絶せよ!」などのスローガンの下に何千というデモと集会がソ連全国で行われた。ことしの8月6日からすべての核実験を停止することにしたソ連の手本に米国もならえと呼びかけたM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長の声明は、ソ連の全国民から支持された。

これらの大衆集会で指摘されたとおり、ソ連が原子兵器禁止に関する国際条約の締結を提案した一九四六年から、こんど発表されたソ連の核実験の一方的停止にいたるまでの約40年間、ソ連は核の脅威を除くために絶え間なく闘ってきた。そしていまもソ連は核兵器廃絶のための闘いの先頭に立っている。ソ連は、ほかの核大国と合意ができれば、いつでも核軍縮に着手する用意がある。ソ連がジュネーブで米国と交渉を行っているのも、宇宙での軍拡競争を始めず、地上での軍拡競争を停





右　イルクーツク州ブラーツクの反戦集会で発言する日本のコダマ・シンヤ君（音訳）

下　ナホトカの近くにあるピオネール・キャンプ〝パルス〟の反核集会。キャンプに滞在中の日本の子供たちも参加した。

左　ラトビア共和国首都リガ近郊のピオネール・キャンプでは日本からのお客さんを迎えて集会を開き、広島と長崎の悲劇をしのんで日の丸とラトビアの国旗を掲揚した。





◀フルンゼの反戦集会で発言する第12回世界青年学生祭に参加したキルギス梳毛・羅紗コンビナートの従業員ヌリア・タティベコワ

キルギス共和国の首都フルンゼの反戦集会







右　ボルゴグラード州のピオネール・キャンプ〝チャイカ〟の反戦集会

上　ミンスクの10万人反戦婦人集会

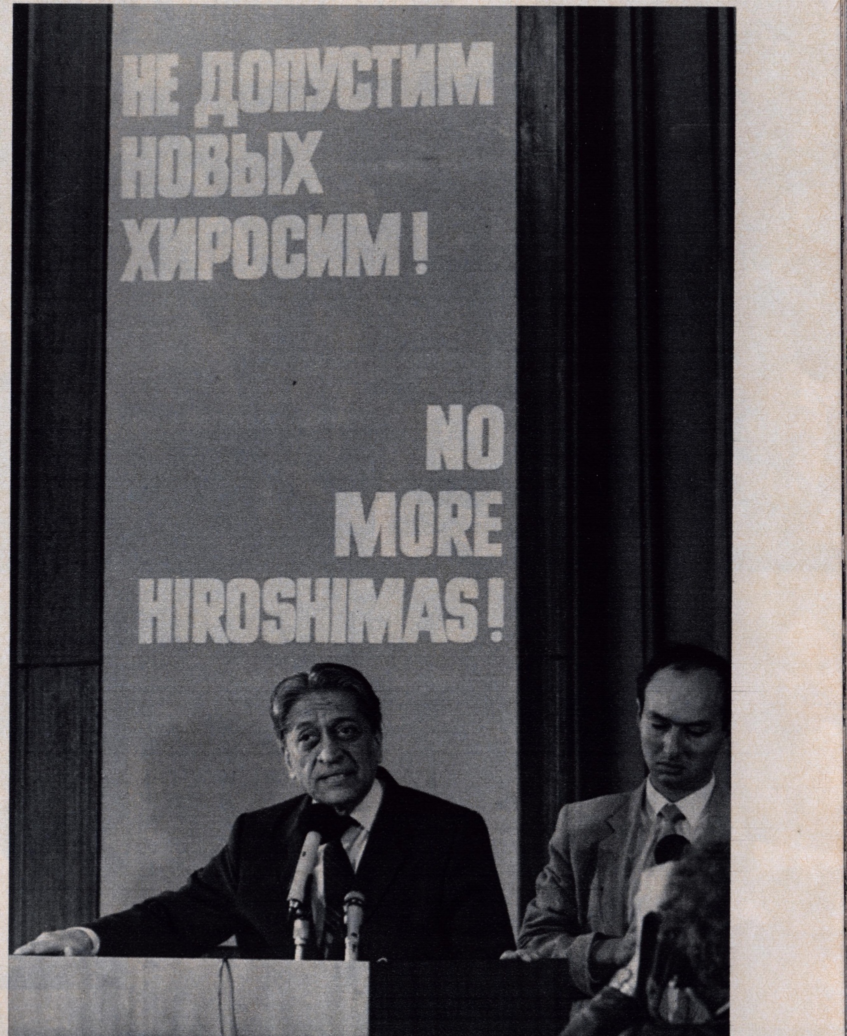
下　アゼルバイジャン共和国首都バクーの平和擁護全市集会

止し、核軍備を思い切って削減して、結局その完全廃絶へ持っていくためなのである。

　ワシントンは、残念ながら、相変わらずこれを妨害している。反戦デモや集会に参加した人々は、核実験を続けるつもりだという米国政府首脳たちの声明を強く非難したが、この声明の目的は事実上、一方的な軍事的優位を占



めるために新型の大量殺りく兵器をつくり、新しい軍拡競争を展開することにある。
　ウクライナ、ベロルシア、グルジアなどの共和国でのソビエト人の平和行動と核軍拡反対デモは大衆的性格のものとなった。一例をあげると、ウクライナのドネツク州だけでも一万七〇〇〇回のさまざまな反戦行動が行われ、その参加人数は約二〇〇〇万人に達した。
　「核兵器禁止と広島・長崎被爆者との連帯のための行動週間」には外国の代表団や観光客までが大勢参加した。レニングラード、キエフ、ハバロフスク、ナホトカ、オデッサ、ヤルタ、ハリコフ、リガ、カリーニン、コストムクシャ（カレリア自治共和国）などで核実験停止を求める国際的会合が催された。
　日本の平和運動家たちは反戦デモや集会に積極的に参加した。ちょうどこの時期にソ連対外友好・文化交流団体連合会などの招きで訪ソした日本の社会団体の代表三〇〇人もソ連にいたのである（この三〇〇人の代表団については本号の冒頭記事参照）。
　ハバロフスク地方、イルクーツク州、ボルゴグラード州などでは反戦集会がピオネール・キャンプ、とくにソ連と日本の小中学生が一緒に夏休みを楽しんでいたキャンプで行われた。ハバロフスクの姉妹都市新潟の小学生たちはアムール川の岸から水面に折り鶴を何百も流して、広島、長崎の被爆者を追悼した。子供たちは善意の人々に宛てた次のメッセージの手紙に自分の名前を書いた。「二度と広島・長崎を繰り返させてはならない。私たちは、全世界の人々が肩を組んでこの地球を危険から守るように呼びかけます。私たちは、要求します。——地球の子どもたちに平和を！　いつも太陽を輝かせよう！と」
　8月6日には大勢のピオネールが自発的に畑へ出て取り入れを手伝い、もらった賃金を平和基金に寄付した。サハリンのホルムスク、ポロナイスク、スミルヌイフなどでは青少年の集会があって、米国もソ連の手本にならって核実験のモラトリアムを発表せよと強く求めた決議を採択した。
　9月2日にはソ連の平和運動の活動家たちが教師と一緒になって、恒例になっている「平和の授業」を全国の小中学校で行った。平和をテーマにした生徒の優秀作品——作文、図画、ポスターなどが来年行われる国連の国際平和年にちなみ、国連事務局宛てに送られた。



モスクワの平和擁護委員会で開かれた反戦集会で演説する世界平和評議会のロメシ・チャンドラ議長

ソ連共産党第27回大会に向けて

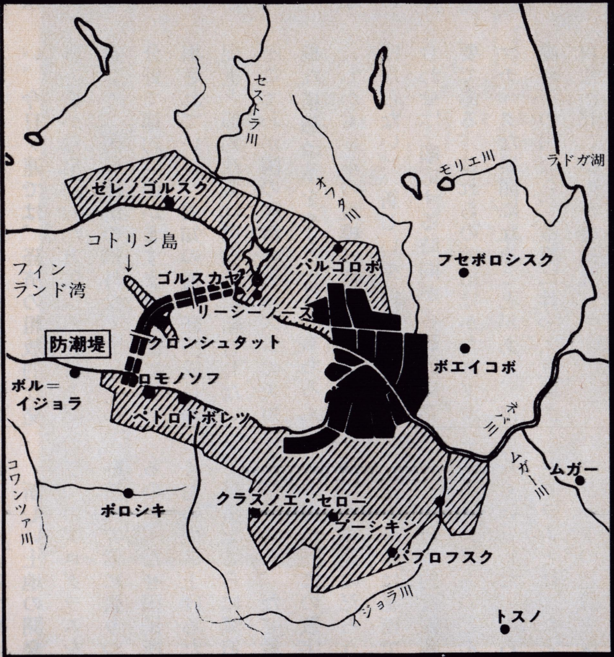
経済成長の促進は次期5カ年計画の主要課題

本誌経済評論員　**レオニード・コレネフ**

　ソ連の経済はもう数十年間も後退することなく発展し続けている。この間の経済の伸びはめざましく、例えば一九五〇年に比べて工業生産高は8倍以上に、農業部門の生産高は3倍以上に増えた。ついでながら、現在のソ連の工業生産高は一九五〇年の全世界の工業生産高よりも多い。
　当然ながら、生産高が伸びたおかげで国民所得も増え、一九五一—一九八四年の間に国民所得は7倍に増えた。なるほど数字で見ると、伸びはかなり大きいが、最近ソ連で繰り返し言われているように、国民所得の現在の伸び率は明らかに不十分で、多少のデコボコはあるが、年間約3％にとどまっている。このテンポを年間最低4％に引き上げること（それも出来る限り速く）が必要であり、これは次期第12次5カ年計画（一九八六—九〇年）の主要課題となろう。
　ミハイル・ゴルバチョフがレニングラード党組織の活動家集会で表現した「わが機関車の速度を速める」という課題は、もちろんたやすい課題ではない。今日ソ連では、経済の粗放的な発展方法から集約的な方法への移行と関連して、国民経済の例外なくすべての分野で節約問題がますます前面に押し出されている。周知の通り経済成長の促進と節約政策は自動的に結合しない。そこでわが国の経済メカニズムの大規模な構造改革をやるには、もちろん（しかも変革の規模は拡大されなければならない）、新しい条件に「呼吸を合わせ」、順応する時間が客観的に必要である。これらの改組はかなりドラマチックな展開になることがあり、市場経済の国なら、改組に伴って危機的現象が起こるのが普通だ。
　ここでつけ加えておかなければならないのは、国の北部と東部の広大な地域の経済開発が、いぜん課題であることだ。現在および21世紀の経済成長の主要な見通しはこの課題と結びついている。これらの土地はソ連の面積のほぼ2/3を占めている。
　新しい土地の開発と構造改革という二つのプログラムを遂行するだけでも、経済は非常に張りつめた状態におかれるのに、なぜ国民所得を年率3％から4％に引き上げるために努力することで経済をさらに緊迫したものにするのか？　また、なぜ最小限この数字までなのか？　この数字はどんな計算に基づくものなのだろうか？
　その理由は秘密ではない。それは、たとえ経済的な困難が起こっても社会的プログラムのどんな切り捨てや縮小もくいとめたいからである。社会的プログラムとは、たとえば年間二〇〇万フラットの建設を保証する住宅プログラムや消費物資の生産拡大プログラム、あるいは食糧計画などである。これらの計画もやはりすべて長期計画であり、順次実現されている。ここで指摘しておきたいのは、ソ連では第2次世界大戦後、国民の生活水準が向上しなかった年は1年もなかったという事実だ。長期間の指数で見ると、たとえば、人口一人当たりの実質所得は15年ごとに倍増している。
　そして社会的プログラムを無条件に優先させ、経済成長全般の諸計画と結びつけた計算により、国民所得の必要最小限の増加率——年4％という数字が出てきたのである。
　この成長テンポを維持するのは先に述べたように容易ではないだろう。しかしこの課題は現実的なものであり、その実現の土台になるのはこれまでの5カ年計画中につくられた強固な経済力である。ソ連には必要な資源や科学技術の成果があり、経済の計画的、目的志向的な発展システムそのものに柔軟性と常時改善の諸原則が貫かれている。

レニングラードの大防潮堤

本誌記者　ユーリー・シニトニコフ
カメラ　V・ロゾフスキー



レニングラード市を洪水から守る防潮施設

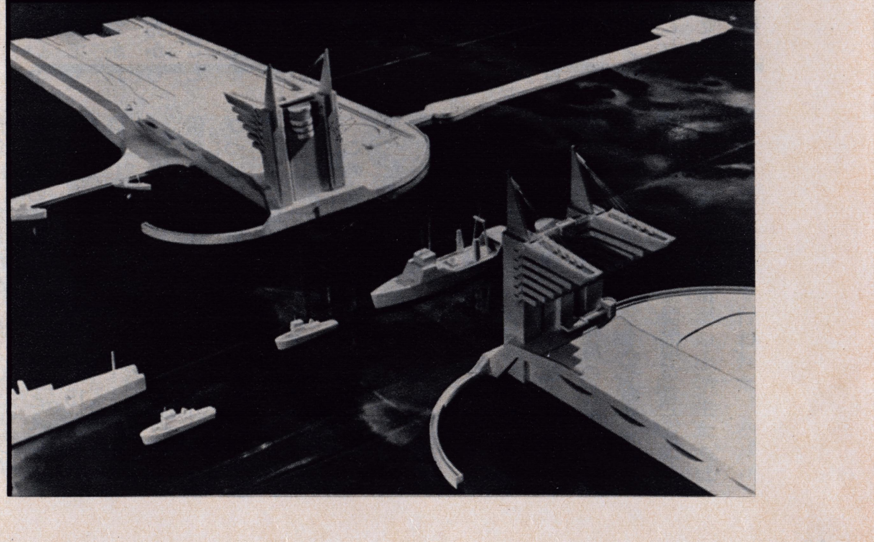
ほかの土地からレニングラードを訪れる人たちは宮殿や博物館にうっとりし、その感動を互いに熱っぽく、夢中になって語り合うのが常だが、レニングラードっ子自身は、と言えば、自分のまちをよく知り、まちを愛し、誇りにしているのは言うまでもないが、誰かに会えばお天気や気まぐれな自然現象について話す方が多いようだ。

それというのもレニングラードはバルト海フィンランド湾に注ぐネバ川のほとりにあり、大西洋の〝お天気の調理室〟の気まぐれに大きく依存しているからである。冬、レニングラードの人たちは大雪や長引く雪解けをやかましく論じ立て、春はネバ川の氷が割れて流れ出すのをみんなが待つ。夏は白夜が話の種になり、秋は洪水が人の口にのぼる。それに近年はその洪水が冬も話題になるようになった。

確かに、12月の朝の通勤時に水のいたずらで河岸通りのアスファルトの路面に運びこまれたネバ川の氷塊を見かけたり、それにまた大晦日の晩、お祭り気分のラジオコンサートが、ネバ川の増水の危険を伝えるアナウンサーの声で中断されたりすれば、黙ってもいられないのが人情だ。

二八二年間――まさにレニングラードの歴史はこれだけを数えるわけだが――に起こったネバ川のすべての氾濫（はんらん）の年代記が、天気予報課職員の何世代にもわたる作業によって作成された。

今では気象予報官の油断なき警戒のおかげでレニングラードの人たちは、海が攻撃を仕掛けて来る6時間前に、増



レニングラードの防潮施設の模型（一部）

水の危険を水位が5㎝と違わないほどの正確さで知ることが出来る。

レニングラードではネバ川の水位が河口の平均水位を一五〇㎝上回ると洪水と呼ばれる。最初の洪水が起こったのはレニングラード創建の年、一七〇三年のことで、その時は2m余も増水し、ペトロパブロフスク要塞の造営用に用意された建設資材が押し流された。その後も洪水は定期的にくり返され、平均すると年に一度ぐらいの割合で起こっているが、科学的観測によってもその厳密な法則性は確認されていない。海からの深刻な脅威が一度もなかった8―12年ぐらいの期間と、しばしば水害に見舞われた5―8年間の時期が知られている。

水害の歴史

レニングラードの洪水の記録は市内各区域の建物の正面にがん丈に打ちつけられた記念板に刻まれている。その時どきの洪水の最高水位と日付が記されたこれらの記念板は市内に20以上もある。もちろんすべての洪水が、花崗岩と大理石に記されているわけではない。自然災害としてレニングラードの歴史に残った洪水だけが刻まれている。

ネバ川の水面から三一〇㎝の高さにある線は一七七七年9月21日の夜、不意に襲来し、まったく間に都を水浸しにした洪水を思い出させる。その夜の洪水は暴風を伴い、激しい風雨に建物は倒れ、三本マストの帆船が岸に打ち上げられた。不意に災害に見舞われた人々は助かる見込みのないものすごい暴風雨であった。その夜の死者は数千人にのぼったという記録がある。

3m75㎝まで水位が上昇した一八二四年11月7日の洪水は最も激しいものだった。この時は昼間だったので犠牲者は六〇〇人を超えなかったが、崩壊した建物は四六二二戸、負傷者は三六八一人を数えた。市の経済は痛手を受け、その復興には長い年月を要した。

古老の記憶だとレニングラード史上第二の規模の洪水は次のようなものであった。一九二四年9月23日、水位は三六九㎝まで上がり、市のほぼ半分が水に浸った。洪水で電力網、電話線、水道管がずたずたにやられ、19本の橋と舗装道路が数㎞にわたって破壊され、五〇〇〇戸の家屋が損害を受け、一〇五の工業企業が操業を停止した。だが救助隊の的確な行動によって犠牲者数は最低にとどめられた。これは、偶然の一致ではあったが、災害の起こる5日前に採択された洪水防止対策に関するレニングラード市ソビエト執行委員会（市議会）の決定によるところが大きい。

水位二八二㎝まで達した一九五五年10月15日の洪水も忘れられない。この洪水は専門家が前もって予知し、警告したので犠牲者は出なかったし、経済的損失も少なくてすんだ。

レニングラードを親善訪問中の英国の空母〝トライアンフ〟の乗組員もこの日、いや応なしに勝手気ままな自然のいたずらの目撃者にさせられてしまい、ある意味では被害者になった。乗組員たちは夜、アレクサンドル・プーシキンの詩を原作にしたバレエ『青銅の騎士』を楽しんでいた。これは一八二四年の洪水を背景に展開される作品だ。ところがこのバレエの舞台の出来事が乗組員たちには観劇のあとも岸での冒険として続いた――空母の錨が切れ、艦は花崗岩の河岸の方に押しやられ、辛うじて間に合った曳船がようやく事故を防いだ。街路や河岸通りから水が引いた朝方、やっと乗組員たちは自分の艦に帰れた。

今の世代の人々の目の前でネバ川が氾濫したのは、一九六七、六九、七三、七四、七五、七七、七八、七九、八二、八三、八四の各年である。記録的だったのは一九八三年で、この年には市民は24回も水位の危険な上昇に脅かされ、そのうち10回は予報官によって洪水として記録された。

自然災害をどう克服するか

昔から自然災害には警戒信号がつきものだ。昔は大砲を発射したり、鐘をついたり、旗や信号灯を高く揚げて危険を知らせたが、現代はラジオやテレビで知らせる。ネバ川の氾濫は市民に多くの不幸と損失をもたらしたので、レニングラードでは昔からこの洪水と闘う手段を探し、改良することを余儀なくされた。

レニングラードの創設者ピョートル一世（大帝）は河岸地帯を建設する時、運河から掘り出した土を入れて低地を安全な高さにし、岸をくいで堅固にするよう要求した。市の低地を堤防や高い岸で守る計画もあった。〝余分な〟水を逃がしてやる相当距離の排水運河さえも作られた。だがこれらの考えはすべて、実現されたものもされなかったものも、実践が示したように、問題解決にはならなかった。

ようやく20年ほど前、専門家たちが現代的研究方法を駆使してレニングラードの洪水のかなり複雑なメカニズムを解明した。危険ははるか遠く、アイスランド沿岸からやって来るのが分かった。アイスランド沿岸の大西洋上で発生したサイクロン（異常低気圧）がバルト海に移動する。中心の低気圧はサイクロンに巨大なポンプの性質を与えるので、サイクロンは海上を通過しながら海面を約1m持ち上げ、その結果いわゆる〝長い波〟が発生する。この波頭は最高時速一〇〇㎞で、幅が狭く、浅いフィンランド湾の奥（ネバ湾）めがけて押し寄せ、そこで2・5から3倍の高さに成長する。このとき海はネバ河口に大量の水――ネバ川の平均流量を40―50倍も上回る水量を送り込む。当然、ネバ川は氾濫する。

サイクロンそのものと同じようにレニングラードの洪水は急に発生し、収まるのも早い。水位は普通、毎時1mの速さで上昇し、危険水位が続くのはわずか数時間である。これが海上から

押し寄せる高潮の唯一の法則性だ。そのほかはすべての面でこの自然現象は〝規則なしに戯れる〟。計算が示すところによると、一連の水理学的、気象学的状況が重なった場合、ネバ川の水位は5・4mまで上昇する可能性がある。その場合、市の$\frac{1}{3}$は浸水地域になり、しかも河岸地域は地上3mの高さまで浸水する。これほどの災害がいつ起こるのか、この秋なのかあるいは一〇〇年後なのか、誰も予測できない。

一九二四年の洪水のあと、問題の工学的解決を求める試みがいくつかなされた。だがレニングラードを洪水から守るプロジェクトの作成作業は第2次世界大戦によって中断された。ドイツ軍によって封鎖されたレニングラードは約3年間も闘ったのだった。その後は市の復興に何年もかかった。ようやく一九六六年に再びこの問題が脚光を浴びた。遠い将来を見通したレニングラードの発展のマスタープランが検討された年である。レニングラード水工施設設計研究所〝レンギドロプロエクト〟は市を洪水から守る効果的方法の開発という課題を与えられた。



『ペテルブルグの洪水』（昔の版画）

水浸しのレニングラード



〝長い波〟への備え

〝レンギドロプロエクト〟では、レニングラードを洪水から守るプロジェクトの作成作業は、水工学者セルゲイ・アガラコフを中心に進めれた。アガラコフはその一生を通じて2度もレニングラードを守る使命を負うことになった人だ。戦争中はレニングラードへの近接路に防御陣地を建設した。

洪水防止プロジェクトでは狭く、浅いフィンランド湾の自然の特徴を利用することになった。フィンランド湾にはクロンシュタット市のあるコトリン島が浮かんでいる。アガラコフの構想は、このコトリン島とフィンランド湾の南北の岸を頑丈な堤防でつなごうというのだった。

この大プロジェクトを細部までつめるのに6年かかった。アガラコフ集団は技術・経済資料を作成し、国内の50以上の科学研究所と設計所の作業を調整した。そのうちの20の研究所がネバ川およびネバ湾の環境保全、水理の諸条件の予測の作成、衛生状態に関連する膨大な量の研究を行った。防潮堤の内側で起こるであろう全過程について のあらゆる知識を得るために、理論研究、実地研究が幅広く、大々的に行われ、ネバ湾の数学的、水理学的、空気力学的、電気的模型が作られた。

一九七八年末、ソ連閣僚会議が技術プロジェクトを承認した。セルゲイ・アガラコフは残念なことに自分の構想が実際に完成するのを見ることなく、一九八一年にこの世を去った。だが工事の開始は見ることが出来た。アガラコフの大胆な構想と正確な計算によって工事は歩み出した。

最終的にはこれはダムでもなく、堤防でもない。一連の巨大な、種々の用途のある設備、構造物、メカニズムを内蔵した複雑な水工コンプレクスで、その多くは世界でも初めて開発・実用化された比類のないものである。

全長二万五三八〇mのコンプレクスには、高さ8mの石と土砂でできた防潮堤が11、船舶を通過させるための水門が二つ（幅二〇〇mと一一〇m）ある。自然の水の流れが損なわれないように幅二八〇―三三〇mの通水路が6本設けられる。海から〝長い波〟が接近すると複雑なメカニズムが作動して5分間で通水路が遮断され、30分後には船舶用水路の水門が閉じる。

建設状況は次のルポで紹介しよう。

防潮堤工事の現場を見る

レニングラード駐在本誌記者　ドミトリー・ユリエフ　カメラ　V・ロソフスキー

われわれが乗ったモーターボートは水面から浮き上がり、水上滑走に入った。やがてネバ川を抜け、広々としたフィンランド湾に出た。市街は背後に遠ざかり、前方のもやの中にコトリン島の輪郭がぼんやり見えてきた。その少し右手に、幾何学的な形をした巨大な構造物が見える。

進むにつれて橋げたのような形がますますはっきりしてきた。海に橋?

「あれは橋ですか!?」と、私はエンジンの音に負けないような大声で隣のユーリー・セベナルドに叫んだ。

ユーリー・セベナルドは49歳。家系にフランス人の血が混じっているというが、彼自身はフランス語を知らない。その代わりタジク語を自由に話し、アラビア語も分かる。水工技師という職業柄身につけたものだ。彼は3年間エジプトでアスワン・ダムの建設に参加し、そのあと11年間タジク共和国の山地でヌレク水力発電所の建設に携わった。この発電所のダムは世界で最も高いものの一つ（三〇〇m）である。

このような経験が買われてユーリー・セベナルドは5年前、フィンランド湾に防潮堤を建設する大きな建設局の局長に任命された。

〝橋〟から三〇〇mほどのところでセベナルドが私の問いに答えた。

「工事中も私たちは船の航行を妨げるわけには行きません。だから私たちは海の浅い部分に臨時の運河を作りました。その上をこの一一〇mの橋げたが渡っているのです。橋も臨時のもので、資材運搬用です。これによって湾の北岸からコトリン島まで陸路で行けるようになります。海底トンネルが完成して工事が終われば、橋は取り壊します」

モーターボートはクレーン船がつないである橋脚に横づけした。セベナルドはクレーン船の船長に用があるというので、私は一人で橋に登った。海面から20mの橋の上からは、すべてを見渡すことができた。

2本の道が、両側から橋に通じている。高くはないが広い土の堤防が、それぞれ島と湾の北岸から、橋に向かって湾の水面を横切って伸びて来ている。堤防の先端に向かって、土を積んだダンプカーがひっきりなしに押し寄せる。海面には、バケットで海底からさらった砂を積んださまざまな船が行き交っている。

工事が始まったのは一九七九年の夏だった。沿岸の建設基地を作るのに1年かかった。一九八〇年8月、ダンプカーがフィンランド湾の北岸から最初の石や砕石を海に投げ込んだ。浅いところでは、堤防は1日に40mの速さで伸びた。堤防がすでに岸から10㎞も伸び、海の深さも5mを超えたいま、1日に伸びる速さは鈍った。だが、堤防はコトリン島からも伸びている。

「この工事には膨大な量の資材と機械が必要です」とセベナルドが説明する。「防潮堤の基礎を築くためには三五〇〇万立方mの土や砕石、石、二五〇万立方mのコンクリートおよび鉄筋コンクリートを投入し、一〇万tのシートパイルを打ち込み、五万tの鉄骨を組み、数百台の機械やユニットを運び込まなければなりません」

工事のために、湾岸まで鉄道の専用線が敷設された。だが、鉄道だけでこれだけ大量の資材を処理することができないのは明らかだ。河川用の船舶が応援にあたることになった。ところが、湾は水深が浅いので、多くの場合、中型船でも工事現場に接岸することができず、資材の積み替え所が必要だ。工事のために独自の吃水の浅い船――貨物船や特殊用途船を用意しなければならなかった。

ユーリー・セベナルドは言う――「われわれは潜水作業用艇からクレーン船に至るまで、さまざまな船を約30隻保有しています。水夫も船長も提督もいます。たとえば、船団の副指揮官はレフ・ガルクーシャ退役海軍中将です」

モーターボートが向きを変えて、堤防に船首から接岸したとき、湾の北岸はやっと見えるほど遠かった。岸までの残りの部分を、われわれは無線で呼んだ自動車に乗って帰った。実際に通ってみると、堤防が切れ目のない防壁ではなく、ところどころ水の通路が開けてあることが分かった。その上は橋になっている。ネバ湾の流れを確保するために、このような水路が6カ所予定されており、そのうちの一つはすでにでき上がっていた。それは長さ三三〇mの鉄とコンクリートの巨大な構造物である。ここに幅24mの水路が12本開いている。それぞれの上に、高潮が押し寄せたときに降ろす金属製の弓型の扉が固定されている。

岸のすぐそばでユーリー・

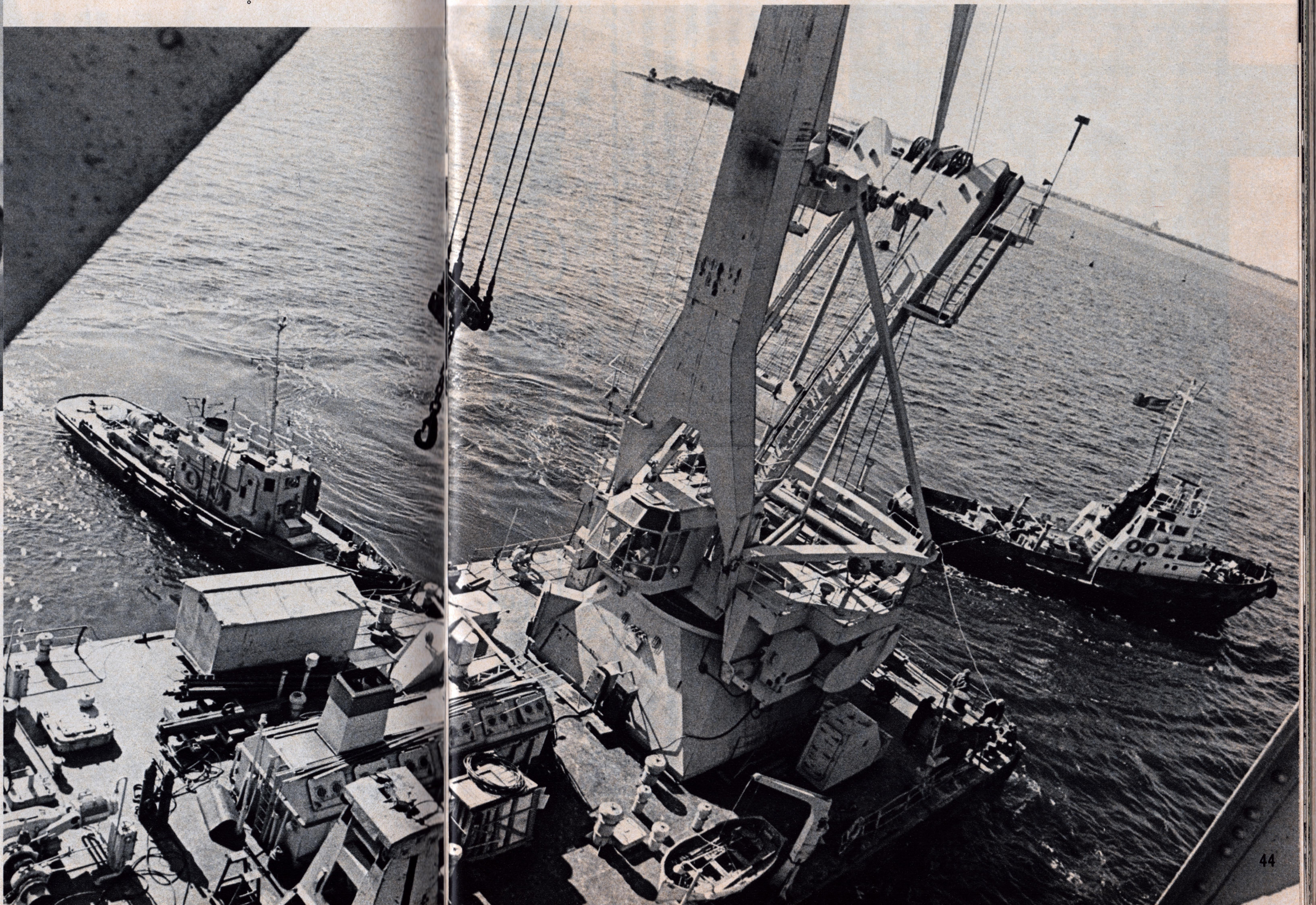
セベナルドは私に、堰堤で海から仕切られた深い巨大な穴を示した。それは近いうちに外洋船のための港になるもので、いまはまだ水がなく、穴の底では大工、コンクリート打設工、鉄筋組立て工、溶接工が鉄筋コンクリートの箱を作っていた。箱は長さ一三二m、幅50m、重さ五万t。箱ができ上がると、穴に水を入れ、箱を浮かび上がらせる。そのあと箱を6km沖合いに曳航して、堤防や橋の延長線上にある予定地点に沈める。

ユーリー・セベナルドの説明によると、この新しい工法によって工期が約2年短縮できるという。もっとも、特殊な工事の場合、さまざまな新しい工法を探求するのは、ここだけのことではない。

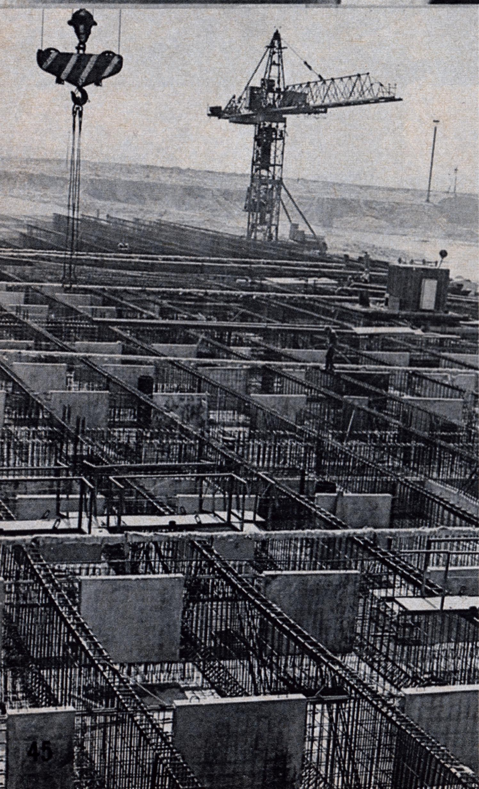
私はこのプロジェクトの生態学的側面について質問した。

彼はこう答えた——「私はソ連でこのように大規模で、環境保護の問題がこれほど綿密に検討された工事を、ほかに知りません。設計だけでも何冊もの本になりました。たとえば、ネバ川のすべての流れの河口での断面積は合計六五〇〇平方mになるが、船のための通路も含めて、防潮堤の水の通路の断面積はその1・5倍ある。だからネバ川の流れにとって、防潮堤は何の障害にもならない。研究者たちのこのような論拠を私は信じています。

フィンランド湾で起こっているさまざまなプロセスが、模型と実地で調査されました。とりわけ、ネバ湾の岸沿いには実質的には流れがないことが分かりました。そのため、ある区間では、いわゆるよどみが形成されています。工事の過程でわれわれはそこを埋めたので、岸の形状は直線的になり、その結果、岸沿いの流れが強まりました。しかもわれわれは、水門を操作する







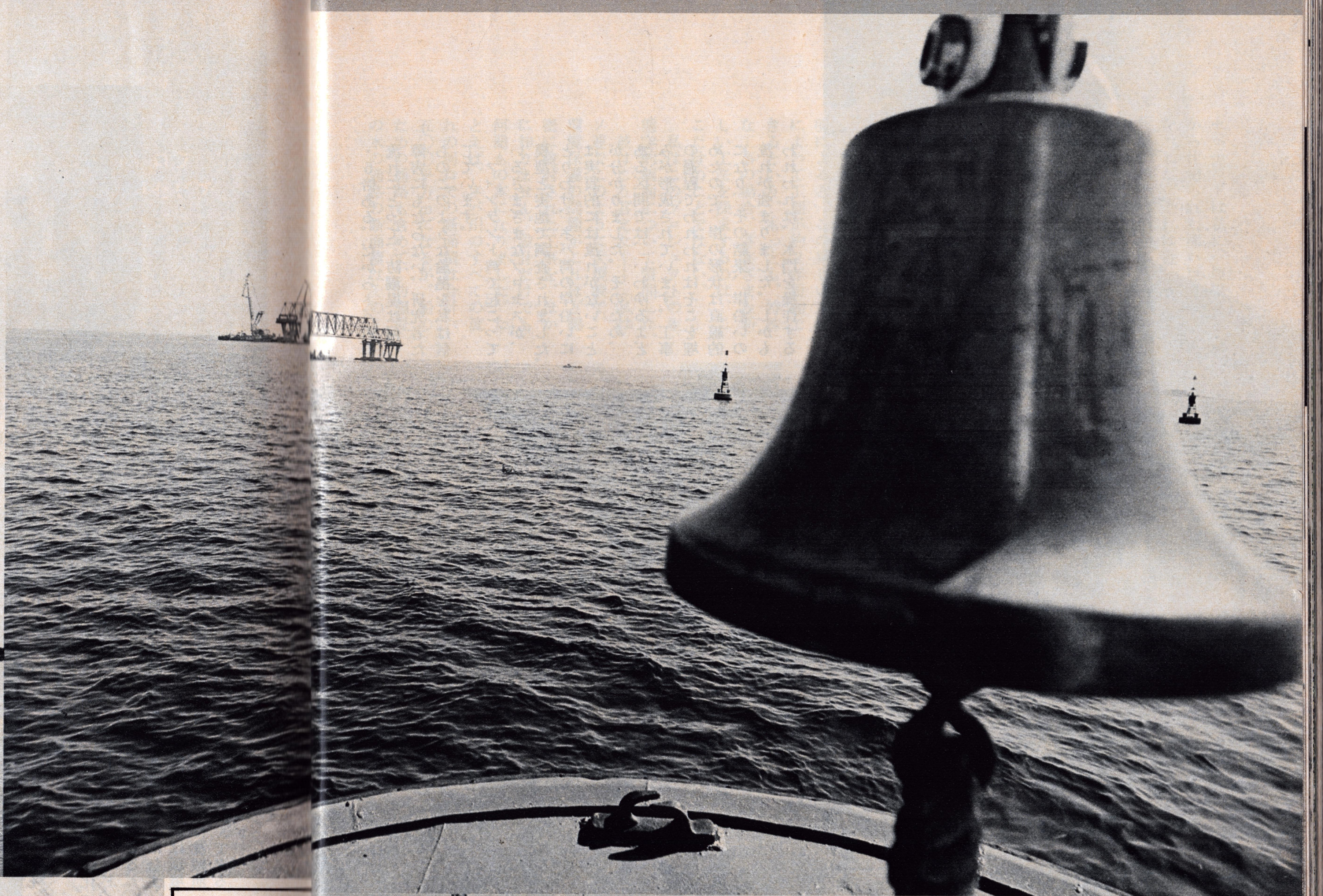
右 作業中のクレーン船
上 防潮堤プロジェクトの主任技師S・クラエフ
左 水の通路になる部分の基礎工事

ことによってその流れを調整できるのです。この種の問題のために、水文学者はネバ湾のさまざまな図を二〇〇〇点も作成しました」

水文学者たちの理論的計算は、ネバ川河口デルタ、ネバ湾、フィンランド湾の水力学的に自動化された模型によってテストされている。この模型は一四〇〇平方㎞の水域を実物の五〇〇分の一の縮尺で再現する。このユニークな施設の屋根の上には、サッカーコートが楽に収まるだろう。模型の面積は五五〇〇平方mある。岸と海底がコンクリートで作られたこの模型の精度は、許容誤差1㎜。

防潮堤の施設全体が完成するのは一九九〇年だが、一九八七年にはすでに、高さ2m半の高潮を食い止めることができる。また、そのころまでに全長25㎞のフィンランド湾横断道路も全線開通する。完成すれば、レニングラードを取り巻く全長一五〇㎞の環状道路の一部、6車線の高速道路になる。そのうちの一八〇〇mは橋で、三三三七mはトンネル。これによってレニングラードは市内を通過する自動車を減らすことができ、フィンランド湾北岸の休息ゾーンと南岸の休息ゾーンが結ばれる。

それだけでなく、フィンランド湾横断道路そのものが、海の景色を眺めることのできる快適な場所になる。計画では、高速道路沿いに遊歩道、展望台、砂浜、ヨットクラブ、ボート場、喫茶店、レストランも建設されることになっている。





右　現場で方針を検討する専門家たち
下　プロジェクトの総責任者ユーリー・セベナルド





右　堤防の水を通すための部分。水を遮断するための弓型の扉がついている。
上　コトリン島と作業現場を結ぶ資材運搬用の道路のための橋。工事中はこの橋の下を船が通ることになる。

防潮堤の建設をどう思うか？

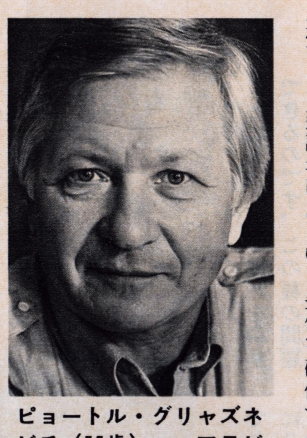
——市民にインタビュー

レニングラードで現在進行中の大工事は当然市民の高い関心を呼んでいる。ネオニラ・ヤムポリスカヤ本誌記者が何人かの市民にインタビューした。



イワン・ノシコフ（54歳）——レニングラード市人民代議員ソビエト執行委員会副議長（副市長）

防潮堤の建設はレニングラードの歴史の一大壮挙です。市当局に工事調整委員会が作られていて、プロジェクトの実現に参加している企業と組織の幹部が加わっています。委員会の目的は、作業が順調に進むよう建設者にあらゆる条件を確保することです。



ピョートル・グリャズネビチ（55歳）——アラビア学者、ソ連科学アカデミー東洋学研究所研究員

レニングラードに洪水防止システムが必要なことは言うまでもありません。大プロジェクトが実現されつつあるのはうれしいことです。と同時に、この自然への干渉が将来、予期しなかった災いとなって返ってくることのないように願っています。



アンジェラ・ポベジーモワ（16歳）——職業技術学校生徒

私も海を抑えつけられる防護施設の建設に参加したかったわ。でもまだ職業技術学校生だから使ってもらえないの。建設作業には高い資格を持った専門家が必要なんです。ただそれはそれとして、レニングラードっ子としても同時代人としても、この大工事を誇らしく思っています。



ロアリド・ポタポフ（51歳）——鳥類学者、ソ連科学アカデミー動物学研究所研究員

私や同僚の生物学者たちはフィンランド湾の変化に対して慎重な態度をとっています。フィンランド湾の外洋から閉ざされることになる部分で起こる、生物学的諸過程の発展を予測するのは、非常にむずかしいからです。その水域の水の流れが減れば環境汚染の脅威は何倍にも増えます。その部分は沈殿池みたいなもので、ネバ川がラドガ湖から運んで来るものすべてがそこに集まってしまうでしょう……

ユーリー・キリロフ（44歳）——新聞記者、「レニングラードスカヤ・プラウダ」紙副編集長



わがまちは、二八〇年余の歴史を持っています。その間におよそ40の水害防止施設計画が提示されました。ピョートル一世の指示で、ネバ川の水のはけ口としてたくさんの運河が掘られたこともあります。しかし運河は助けちゃくれませんでした。いつもの洪水のあと、まち中がまた水につかってしまいました……今日やっと水害防止施設の建設に着手したということは、優秀なプロジェクト、その実現のための技術的、物質的可能性のすべてがそろったということでしょう……

コンスタンチン・エフテーエフ（22歳）——民警員、レニングラード大学夜間部学生



ある日、洪水がはじまった晩、当直をするはめになったのですが、多分、あの晩は誰も眠らなかったでしょう。みんなが、この自然災害の被害を出来るだけ少なくするために頑張りました。

その晩の大変だったことといったら……救助隊の車が何台も走り、危険区域から貴重な品物を運びだしました……複雑な作戦開始前のように民警全体が完全な出動態勢に入りました。洪水防止施設なしではまちはもうやってゆけません。川のすぐそばに住宅地や無数の公共施設があるんですから……

レニングラード郊外の宮殿公園

パブロフスク

カメラ S・ペトロフ V・タラセビチ



パブロフスクの公園の一隅

史跡宮殿公園パブロフスクはレニングラードの南30㎞のところにある。ここはかつてのロシア皇帝の離宮であり、美しい建築群は18世紀末にでき上がった。ソビエト国家の初代教育人民委員（大臣）アナトリー・ルナチャルスキーは、ロシア芸術文化史におけるパブロフスクの優れた意義を指摘してこう述べている。「パブロフスクの造作を構成する選び抜かれた芸術作品は、部屋部屋の非凡な仕上げと相まって、パブロフスクを欧州でも並ぶものの少ない記念物にしている」

……黄色や赤に染まった秋の木々が鏡のような池の水面に映っている。澄んだ空気。木の葉が音もなく砂利道に舞い落ちる。並木道の向こうに宮殿の建物が陽光を浴びて静まり返っている。柔らかい光がホールの絵や彫刻、シャンデリアのガラスを包んでいる。ここでは文字通り、一歩ごとに芸術作品に出くわす。古い大理石のレリーフ、古代ローマの彫刻。ルカ・ジョルダーノ、カルロ・ドルチ、グイード・レーニ、ホセ・リベーラ、アドリアン・ファン・オスターデ、ピーター・パウル・ルーベンスなど17―18世紀のヨーロッパの巨匠の絵が壁を飾っている。

フランスのサボンネリ工房製のじゅうたん、17世紀のブリュッセル製の壁掛け、当時有名だったパリのアンリー・ジャコブ工房製の金めっき家具、ペテルブルグ製のマホガニー細工、フランス王妃マリー・アントアネットが注文して作らせた64点からなるセーブル化粧陶器セットその他、数えあげたらきりがない。

パブロフスクの宮殿群を建築するために、大勢の名のある建築家や装飾家が腕をふるった。一七七七年、女帝エカテリーナ二世が息子のパーベル一世にスラビャンカ河畔の土地を別荘造営用に与えるとすぐに、古代芸術に造詣の深いスコットランド生まれの建築家チャールズ・カメロンが責任者に任命された。彼は宮殿を建てると、森が茂っている場所に公園を計画し、美と均整の極致とも言うべきパビリオンを建設した。彼は古典主義にのっとりながらも、同時に心安らぐ雰囲気を作り出そうと努力した。彼の趣味は必ずしも注文主の希望に沿わず、せっかくの仕事から降ろされてしまった。

代わって任命されたイタリア人ビンチェンツォ・ブレンナは、パーベル一世の要求に従って、宮殿に荘厳さと華麗さを加えた。19世紀初めにはロシアの傑出した建築家アンドレイ・ボロニヒンがパブロフスクの主任建築家になり、そのあとをそれに劣らず有名なカルロ・ロッシが継いだ。彼らは調和をくずさないように注意しながら、宮殿と公園の外観に変更を加えた。

公園には三つの様式が溶け合っている。カメロンはイギリスのモデルにならって、自然の、いわゆる風景公園を作った。ブレンナはフランス式の幾何学的な凝った公園を好んだ。造園工事を完了させた装飾家ピエトロ・ゴンザゴは森と木立ちと草原が入り組んだ北方風の趣向に引かれた。彼は陽光を浴びた広々とした野原が見渡せるよう、平らな公園を好み、過度に凝ることを排した。

ロシア人の貢献も忘れてはならない！ 彼らはほとんど



公園内で写生する親子

静かな並木道にはさまざまな古い彫刻が見られる

カメロンとブレンナにより1782～99年に造営された宮殿

製作者の石工の名を取ったビスコンチ橋



公園の風景と調和する彫刻



1797年にスラビャンカ河畔に建てられた水車小屋。外観はわざと古めかしく仕上げてあるが、中は大理石の暖炉もある快適なサロンで、皇帝たちはしばしばここで休息を楽しんだ。

無名である。農奴出の工匠たちは、どんな立派なものを作っても、それに署名する権利がなかった。これら無名の工匠たちが何人ぐらいパブロフスクで仕事をしていたのかも分かっていない。彼らのうちで、宮殿の完成後に自分の仕事を観賞することができた者はまずいないだろう。パブロフスクは一〇〇年以上にわたってロマノフ家の私有物だったからである。一九一七年の10月革命後ようやく国民の手に移り、だれもが訪れることのできる博物館（史跡）になった。

大祖国戦争（一九四一―四五）中、パブロフスクは破滅の瀬戸際に立たされた。ドイツ軍が迫って来たので、ソ連政府の決定にもとづいて、貴重な所蔵品数千点が後方に疎開させられた。家具の大半は宮殿内に封鎖しなければならなかった。古代の彫刻と宝石のコレクションは地下の秘密の場所に隠された。博物館の職員たちは生命の危険をかえりみず、砲爆撃をくぐって貴重な美術品を運び出した。それでも、パブロフスクに迫った脅威は取り除くことはでき

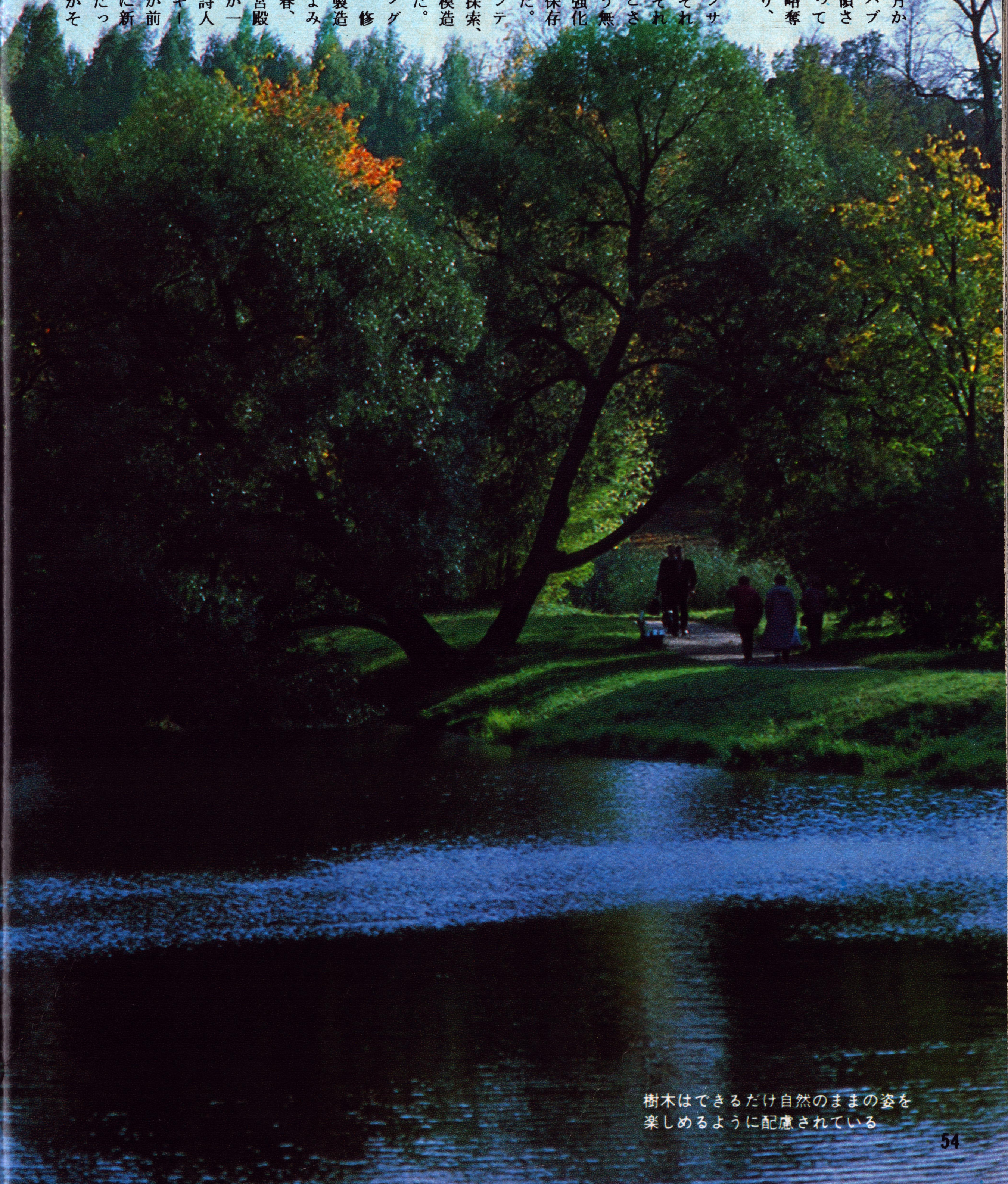


風景に溶け込むよう、わざと古めかしく作られた石橋。

なかった。一九四一年9月から一九四四年1月まで、パブロフスクはドイツ軍に占領された。彼らは博物館に残っていた貴重なものすべてを略奪し、インテリアを持ち去り、退却に際して火を放った。

このユニークな建築アンサンブルの復興の物語は、それだけで一冊の本になる。それは焼け落ちて、ちょっとさわっただけで崩れてしまう無数の破片を特殊な薬品で強化し、修復して、ひとまず保存しておくことから始まった。それから建物の復興、インテリアの仕上げ、装飾品の探索、失われてしまったものの模造品の製作その他が行われた。

パブロフスクはレニングラードの建築家、美術家、修復技術者、装飾家、家具製造者の情熱と技術によってよみがえった。一九七〇年の春、彼らは作業を終了した。宮殿のホールと公園の並木道が一般の人々に開放された。詩人のワシリー・ジュコフスキー（一七八三―一八五二）が前世紀の初めに「一歩ごとに新しい絵が目に入る」とうたった当時のままに、すべてがそこにある。



樹木はできるだけ自然のままの姿を楽しめるように配慮されている

博物館の入口がある宮殿の中央棟





宮殿内のホール



大ホール（玉座の間）は400平方m。当初は大宴会場と呼ばれていた。テーブル上の食器が往時の晩さんの豪華さを物語っている。

公園は小動物の楽園でもある



ノーボスチ通信特派員報告

所期の目的をめざして進むアフガニスタン

アレクサンドル・スホパロフ（カブール）

「われわれの経済業績はまだ大したものではないが、苦しい条件のもとでその業績を上げたのだから、われわれはとにかく業績について述べる権利がある」――ことしの1月アフガニスタン人民民主党の創設20周年の祝賀会議でバブラク・カルマル・アフガニスタン人民民主党中央委書記長、アフガニスタン民主共和国革命評議会議長はこう述べた。

一九七八年4月の民族民主革命前のアフガニスタンは、国民所得が人口一人当たりたったの一六二ドルで、発展途上諸国一二九ヵ国中一〇八位（国連統計）であった。国民総生産高における近代的な加工・採取工業部門の割合は3・3％以下にすぎず、また国民所得の$\frac{2}{3}$と輸出の約$\frac{3}{4}$を生産した農業は、封建的、前封建的な生産関係の重圧にひどくあえいでいた。全農民の約$\frac{1}{3}$が土地を持たなかった。革命前のアフガニスタンは食料品を自給自足できなかったし、工業も原料を輸入にたよらなければならなかった。

従って政権についたアフガニスタン人民民主党の課題は、国を封建主義の経済的、社会的かせから解放し、中世的な暗黒の世界から引き出すことであった。いま農業、運輸、工業で実施されている進歩的変革は、これらの問題の解決をめざすものである。しかし残念ながらアフガニスタンは選んだ道を思うように進めないでいる。その大きな原因は、アフガニスタンに対する宣戦布告なき戦争の火を付けた帝国主義・反動勢力が武力干渉に出て、この国の行く手を妨げていることだ。スルタン・アリ・ケシュトマンド首相が記者とのインタビューのさいに指摘したように、国外から派遣、激励を受けた反革命分子の破壊活動による直接の物質的損害だけで三五〇億アフガニ（約七億ドル）にのぼっている。そのほか西側諸国、とくに米国はアフガニスタンに乱暴な経済圧迫を加えた。

一九七九年に米国議会は、すでに援助中の施設を含めてアフガニスタンに対するあらゆる種類の援助の中止を決議した。米国の圧力で国際復興開発銀行と国際通貨基金は、対アフガン援助を停止した。米国に次いでECからも食料面の制裁を受けたのは、発展途上国でアフガニスタンが最初だった。

こういう措置は、当然アフガン政府の進歩的改革の実施を困難にしたが、改革の進行を止めることはできなかった。アフガニスタン閣僚会議計画化国家委員会で聞いたところによると、アフガニスタンは革命後初めて国民総生産と国民所得が予定の水準に達した。3月20日に終わった昨アフガン年の工業総生産高は4・6％増えて、一九七七年の水準を5％超えた。化学肥料工業、ガス採取業、繊維工業、セメント工業、プレハブ材料工業、製パン業などは着実に発展した。私は、国内旅行中たまたまクナール県で水力発電所の開所式に出席した。同じ水力発電所はこの国の東北部のファイザバード市にも建設された。スイスのBBC会社の援助で建設されていたカブールのガス発生炉発電所が完工した。昨年の電力生産高は七億四〇〇〇万kW時に達したが、一九七八年のそれは六億kW時にすぎなかった。

しかしこれだけ電力生産高が増えても、国の発展する経済の増大する需要にはまだ追いつけない。現在ソ連からマザリシャリフを経てカブールに達する高圧送電線が建設中である。またソ連の援助で、国の経済の近代化に役立つ工業、発電、灌漑、農業などの一連の重要施設が建設、改修されている。

農業では民主的な土地・水資源改革が引き続き進められている。三二万人以上の土地のない農民や土地の少ない農民は、大土地所有者から没収した余剰地を受け取ったか、あるいはそれらの土地で自分の田畑を増やした。一九八一年に水資源の国有化の原則を定めた法律が採択された。

アフガニスタンは60ヵ国余りと貿易しており、天然ガス、綿花、羊毛、カラクリ毛皮、じゅうたん、干した果実や生鮮果実、薬用植物を輸出している。昨年の輸出額は革命直前の年の三億一四〇〇万ドルに比べて2倍余りの六億五六〇〇万ドルであった。

近代化へ歩み始めたアフガン経済は、まだ沢山の未解決の問題を抱えている。国内の反動勢力の死に物狂いの抵抗やアフガニスタンを中世の時代に引き戻そうと努めている国外の敵対勢力の露骨な干渉によって、情勢は深刻になっている。しかしことし3月に開かれた人民民主党の第15回中央委員会総会で指摘されたように、国内の武装反革命勢力と外国のそのパトロンは、アフガン経済を混乱させ、国内に荒廃と飢えをもたらすという主目的を遂げることができなかったのである。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年9月前半）

ソ連共産党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、M・S・ゴルバチョフ同志のチュメニ州視察とそこで行われた党・経営活動家会議、勤労者との会談や対話についての報告を審議した。

会議で指摘されたように、これらの措置は党の経済政策、ソ連共産党中央委員会4月（一九八五年）総会の諸決定を実現し、ソ連の主要な燃料・エネルギー基地である西シベリア石油ガス・コンプレクスのいっそうの開発を保障するために重要な意味を持っている。この地域での生産力をいっそう増強し、石油およびガスの採掘現場の状況を改善する課題、科学技術進歩を促進し、基本建設を完了し、技術水準、ボーリング設備その他の設備の質と信頼性を高める課題が策定された。勤労者に必要な社会・生活条件を作り出し、住宅、文化・生活施設の建設課題をまちがいなく遂行し、商業とサービス分野を改善することに特別の注意が向けられた。

政治局はソ連共産党中央委員会がソ連食糧計画の遂行と農業および農工コンプレクスのその他の分野における科学技術進歩の促進の問題に関してツェリノグラード市で行った会議の結果を審議した。採択された決定では、会議で提起された課題を首尾よく遂行することは、農業政策を実現し、国の社会・経済上の諸課題全体をいっそう成功的に解決するための党の活動を強化する上で大きな意義を持つ、と指摘されている。

政治局はソ連共産党中央委員会の決定「暴飲とアルコール依存症を克服する措置について」の遂行状況に関する問題を検討した。これらの措置が勤労者の完全な支持を受けており、勤労者の労働意欲と社会的積極性を高め、社会における道徳的雰囲気に好ましい影響を与えていることが指摘された。暴飲との闘争を強化するための法律に修正を加える提案が承認された。党機関と党の初級組織に、この方向で現れた好ましい傾向を確かなものにし、まだ残っている欠陥を排除するための活動を強化することが提起された。

政治局は全ソ的な意義を持つ保養地としてのヤルタ地区全体のいっそうの発展に関するウクライナ共和国の党機関と国家機関の提案を支持した。

政治局はM・S・ゴルバチョフ同志とジャンビン・バトムンフ・モンゴル人民革命党中央委員会書記長・モンゴル人民共和国人民大会幹部会議長の会談の結果を審議し、承認した。モスクワで調印された二〇〇〇年までのソ連とモンゴル人民共和国の経済・科学技術協力発展長期計画は、両国間の伝統的な国民経済関係の効率向上のための新しい可能性を開くものである。

M・S・ゴルバチョフ同志とジョルジュ・マルシェ・フランス共産党書記長との会談の結果が承認された。ソ連の共産党員とフランスの共産党員が帝国主義と帝国主義によって煽られている軍拡競争、特に危険な"スターウォーズ"計画に反対し、平和と諸国民の安全、社会主義をめざす闘争で戦友として活動していることが、満足をもって指摘された。

政治局会議では、V・I・ボロトニコフ同志を団長とするソ連党・国家代表団のベトナム独立宣言40周年祝賀のための訪問の結果その他、いくつかの内外問題が審議された。

（プラウダ紙9月13日号）



（レオニード・レメホフ作、イズベスチヤ紙9月2日号）

サマンサちゃんの名が付けられたダイヤ

ミールヌイ（ヤクート自治共和国）10日発。ミールヌイの近くのある鉱床で見事なダイヤモンドが見つかった。32・7カラットのこのダイヤには「サマンサ・スミス」の名が付けられた。これは平和とソ米間の交流強化をめざす闘いの参加者で、先ごろ悲劇的な事故死をとげたこの米国の中学生への敬意のしるしである。

この宝石はソビエト連邦ダイヤモンド・フォンドに保管される。

（プラウダ紙9月11日号）

文化トピックス

古都の新しい祭り



エストニア共和国（バルト海沿岸）の首都タリンのオールド・タウン（旧市街）祭りは今では恒例の行事になった。祭りのプログラムはカーニバル、プロ・アマのアーチストたちの演奏、タリンの芸術家の作品展示即売会と盛りだくさんで、それが丸１週間も続く（休日は朝から晩まで、平日は夜）。祭りは年ごとににぎやかさを増し、スケールが大きくなり、趣向も多彩になっている。

写真はタリンに多い古い建物の壁を利用したアマチュアの写真展。

モルダビアの児童アンサンブル

キシニョフ市（モルダビアの首都）のピオネール・学童宮殿付属の歌と踊りの児童アンサンブル“スペランダ”（モルダビア語で“希望”という意味）は、この夏モスクワで開かれた第12回世界青年学生祭でも公演した。

アンサンブル“スペランダ”はキシニョフ市内の学校の少年少女600人から編成されており、ソ連国内はもちろん、公演旅行をしたブルガリア、チェコスロバキア、



キューバ、フランスでも好評だった。このアンサンブルの歌や踊りは、ソ連の子供たちの生活や余暇の過ごし方、勉強の様子を生き生きと伝えている。

社交ダンスはすたれず



ソ連の若い人たちにも、そう若くない人たちにも社交ダンス・ファンは多い。同好の士は文化宮殿付属のサークルあるいはクラブでワルツやタンゴ、ルンバやマズルカの美しく正しい踊り方を習う。特に優秀な踊り手は共和国レベルや全ソ的なレベルまでのさまざまなコンクールに参加する。コンクールの優勝者たちはプロの人気ダンサー並みに有名になり、テレビにも出演する。写真は今年6月、モスクワで行われたコンクール〝モスクワの灯〟の模様。

ハバロフスクで日本の美術工芸展







8月2日から7日まで、ハバロフスクの展示ホールで「北海道美術工芸協会ハバロフスク展」が開かれ、和紙染色画、木彫、切り絵、陶芸、戸塚フランス刺しゅうなど、33名の作者による作品53点が展示された。同展は北海道日ソ友好文化会館、北海道美術工芸協会が組織し、北海道・札幌市各教育委員会、ソ日協会ハバロフスク支部などの後援を受けて開かれたもの。会場にはたくさんのハバロフスク市民がつめかけ、中でも加藤瑞子さんの七宝焼き、高木志寿江さんの切り絵に人気が集まった。

開会式に出席した北海道からの代表団一行（14名）はハバロフスク滞在中、地元の美術家たちと懇談した。

代表団に加わった北海道日ソ友好文化会館の荒井一志氏は本誌記者に次のように語った――「ハバロフスク市当局の代表、当地の美術家の方々に大変お世話になり協力を受けた。ソ連の人たちが親切でホスピタリティーに富み、日本人との協力を惜しまないことがよく分かった」

写真は展示作品と開会式のテープカット。カットするのはシェフチェンコ・ハバロフスク市副市長と小林　碧団長。

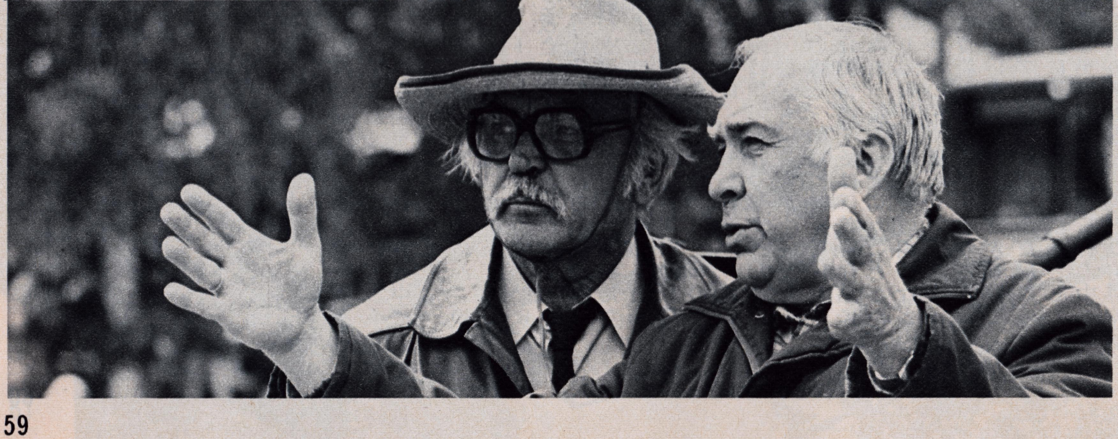
撮影進む『ボリス・ゴドゥノフ』



ロシア連邦共和国欧州部の都市コストロマで目下、劇映画『ボリス・ゴドゥノフ』（二部作）の撮影が進行中。監督は名映画俳優で、『戦争と平和』、『人間の運命』などを演出したソ連人民芸術家セルゲイ・ボンダルチュク。

ボリス・ゴドゥノフ（一五五一―一六〇五）はコストロマの貴族の出で、後にツァーとなるが、プーシキンの史劇やムソルグスキーのオペラの悲劇的主人公として知られる。その強じんな人間、政治家としての性格の複雑さにひかれて自ら主役のゴドゥノフを演じるボンダルチュクは、「しかし、この映画の土台はプーシキン原作の悲劇であり、悲劇の主人公は民衆だ。歴史を作るのは民衆だという立場から、動乱時代と呼ばれる17世紀ロシアの出来事を描かねばならない」と語っている。

写真左はロケ風景、下はボンダルチュク監督（左）とカメラマンのV・ユーソフ。







カリーニン市の“御駐泊の館”（18世紀建築）。エカテリーナ二世がペテルブルグ（現在のレニングラード）からモスクワへ旅行する時に泊まった。現在は美術館。

モスクワ大学に学んで (2)

芸術学博士候補　新田　喜代美

夏季実習

ソ連の大学では、九月一日から翌年の一月二五日までが前期、二週間たらずの冬休みをはさんで、二月七日頃から六月の試験が終わるまでが後期の教育期間となっている。夏休みは七、八月の二カ月間あるが、七月は専攻科目によってさまざまな実習授業が計画されている。この夏季実習は苦しいが、最高に楽しく、おもしろく、生涯の思い出となる。美術史科の一年目の夏季実習は、中部ロシアの古都めぐりだ。大学から大型バスが一台でて、約二週間のバス旅行へ出る。私は一九八〇年の六月（この年はモスクワ・オリンピックの年で一カ月早く後期の授業が終了した）に、この実習に初めて参加した。どんな準備をすればよいのか見当がつかないので、女子学生スベトラーナに尋ねると、筆記用具、カメラ、洗面道具、衣類、寝袋、食料品などが必要だと説明した。中部ロシアの夏の気候は変化が激しいので、ヤッケと毛糸のセーターは欠かせないものだった。

三〇人程の参加者をのせたバスは、新緑の美しいモスクワを後にして、チャイコフスキー博物館のあるクリンへ向かった。私たちの実習は、モスクワ――クリン――カリーニン――トルジョク――スターリツァ――ノブゴロドとその近郊の古いロシア建築（一一世紀から一九世紀のもの）めぐりが主だった。夏季実習には美術史科で教える先生が一人、その他に大学院生や職員が必ず付き添って行く。この年は、東洋美術、とくに日本美術の研究家として知られているセルジュク先生が参加した。彼女の夫グラセービチ先生は、私たちが訪問するカリーニン州とノブゴロド州にある古代ロシア建築の専門家で、この地方の歴史・美術史に精通している人であった。これは私たち実習生にとってとてもラッキーなことだった。グラセービチ先生は、二週間にわたる全行程の案内役を引き受け、中部ロシアに点在する実にさまざまなロシアの建築物（宮殿、教会、民家等々）を丹念に見せてくれた。

ロシアの森の中に建てられた古い宮殿が、今は老人ホーム、保育園、幼稚園などに利用されているケースもあった。また、建築史にとっては重要な意味をもつ宮殿や教会が、修復を待っているものも多かった。ソ連では、大きな工場や企業が自分たちの労働者、職員を休息、療養させるために、休息の家やサナトリウムを豊かな自然の中に建てることが多い。このようなあるサナトリウムの建設予定地の中に、昔の宮殿や木造の教会が残っていた。国はこのサナトリウム建設を許可する時に、宮殿と教会の修復を要求し、サナトリウムの近代的建物がこれらの古代建築物と調和を保つよう指示した。私たちが訪問した時は、宮殿と教会のある森の区域は、サナトリウム利用者の散策のために設計され、サナトリウムの近代的高層建築は、そこからかなり離れた森の一画に建てられつつあった。白樺、かし、松、もみの木が生い茂るこのロシアの森は、新緑に映えていた。

このような実習授業では、美術作品に直接触れられることも大切なことだが、建物の周りの環境、自然との調和などが実感できるのがすばらしい。スライドと写真資料を使っての教室の授業では得られない貴重な経験ができる。

中部ロシアの自然は、豊かな緑につつまれて実に美しく、生き生きとしている。木々がうっそうと茂る森の中へ一歩足を踏み入れると、色どりも鮮やかに野の花が咲きみだれている。私たちを乗せたバスは果てしなく広がる森や草原地帯を走る。バスの中では、学生たちがギターに合わせて歌ったり、



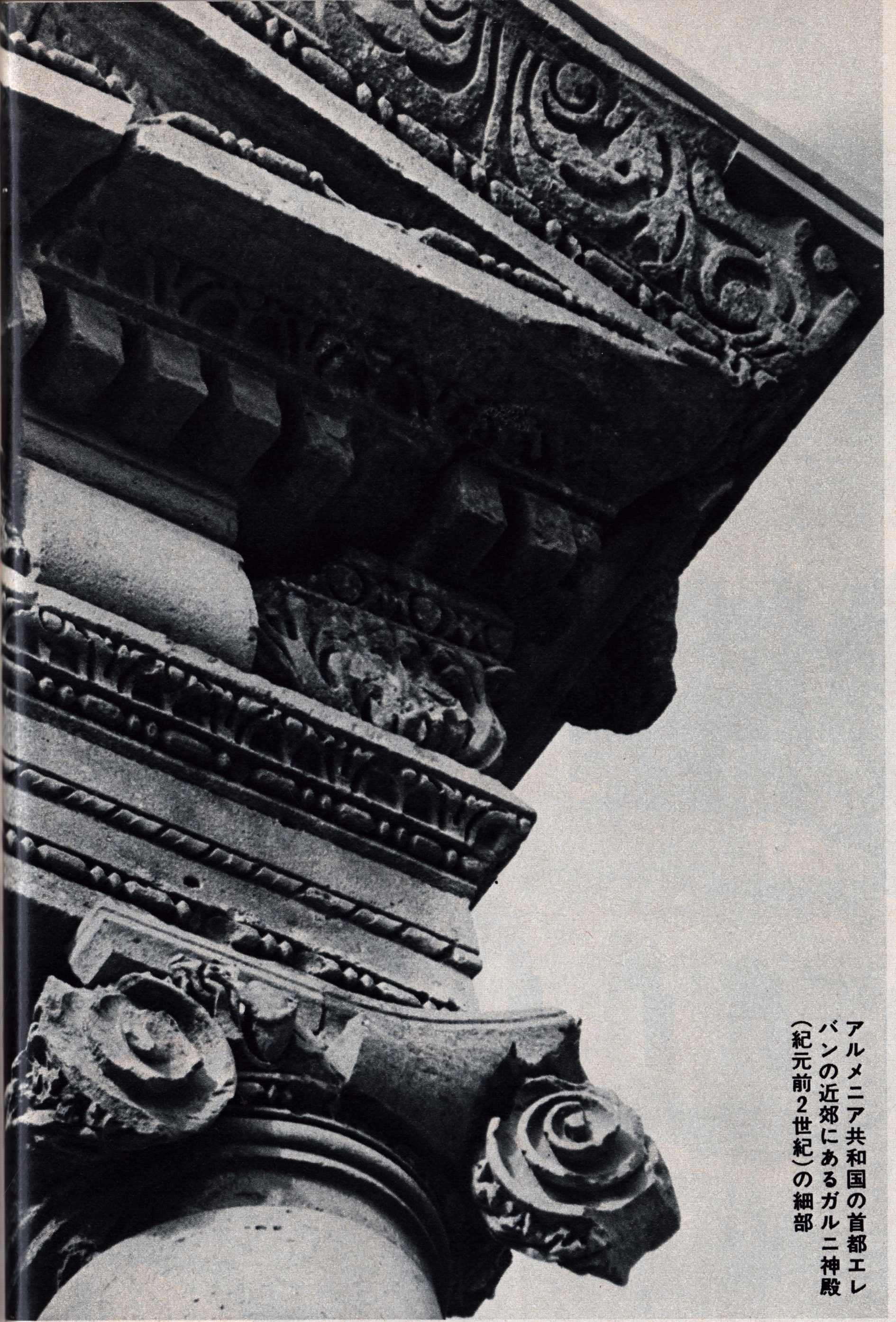
ノブゴロド・クレムリンのソフィア鐘楼

弾き語りをしたり、よもやま話に花を咲かせたりで、若いエネルギーが満ちていた。
北国の六月は夜十時過ぎまで明るく、実習は延々と続くこともある。宿泊所はホテル、学生寮とさまざまだが、宿舎にたどりつくのが夜遅くなることもしばしばだった。夜、一日の仕事が済むと、よくグラセービチ先生の部屋に集まった。先生はこの地方の古代ロシア建築物の調査・発掘に参加している。今でも深いロシアの森の中に埋もれている建築物を捜し求めて調査活動をしている先生は、話がうまい。森で突然熊と目と鼻の先で顔を合わせて命びろいをしたこと、夜中に猪の大群におそわれた村では畑の作物がすっかり踏み荒されたこと、猟師、木こり、素朴な村人の生活などを、先生はジェスチャーたっぷりに語り、私たちは時のたつのも忘れた。

二年目の夏季実習は、コーカサスのアルメニア共和国とグルジア共和国めぐりだった。六月二九日モスクワを発ち、アルメニアの首都エレバンへ飛んだ。これらの夏季実習には毎年、旅費全額と経費の一部が大学から支払われる。アルメニアではエレバン、エチミアジン、アシタラク、セバン湖、ディリジャン、レニナカン、アラベルディとその近郊に点在するアルメニア古代建築、博物館、美術館を九日間で回った。

アルメニアの歴史は古い。首都エレバンは、二七〇〇年余りの歴史を持つ。首都の南東部に、紀元前八世紀に存在した古代国家ウラルトゥの遺跡エレブニ要塞跡が残っている。また、古文書研究で世界的に有名なマテナダラン古文書館があり、アルメニアの古文書（アルメニア文字は四世紀末メスロプ・マシトツによって作られた）だけでなく、諸外国の古文書も含めて約二〇万点が保存されている。私たちの実習は、エレバン市内の史跡、博物館、美術館の見学から始まる。エレバンでは、市の交通機関を使って移動する。街の建物は、淡いピンクがかった凝灰岩で建てられたものが多い。アルメニアは〝太陽と石の国〟とよく言われるが、その国土のほぼ75％が岩肌の多い山岳地帯と石の高原からなっている。アルメニアの古代建築もそのほとんどが石造りだ。

アルメニアには、アルメニア・グレゴリー教会（キリスト教の一派）の古い寺院が各地に散在している。エレバンから車で一時間足らずの所に、世界各国に散らばっているアルメニア人の宗教の総本山エチミアジン大寺院（四世紀にその基礎が置かれた）がある。この寺院の宝物庫の所蔵品は高価なものばかりで、諸外国に住むアルメニア人の寄贈したものも多い。一九世紀末から二〇世紀初めにかけて、トルコ人によるアルメニア人大虐殺（その犠牲者数は二〇〇万人とも言われている）が行われ、多くのアルメニア人は他国（とくに中東諸国、フランス、アメリカ）へ逃れた。エレバンのツィツェルナカベルト丘には、大虐殺の犠牲者を



アルメニア共和国の首都エレバンの近郊にあるガルニ神殿（紀元前2世紀）の細部

悼む慰霊碑が建てられている。一九四六年からアルメニア共和国は、引揚者を受け入れている。

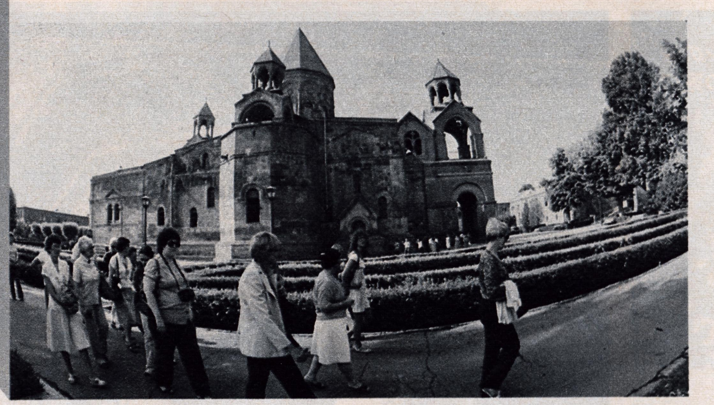
エレバンからグルジア共和国の首都トビリシまでは、ずっと貸切りバスで、主に古い寺院めぐりをする。五世紀から一七世紀のものを中心に見学したが、石造なので良く保存されている。アルメニア科学アカデミーの学術研究員タチキャン・バグラム・シャゲモビチが、アルメニア・グルジアを通して約三週間の実習授業に同行し、とくにアルメニアの建築史を中心に詳しく説明した。学生はメモをとり、建物の外観、内部を見てまわり、実に克明に建物をデッサンしたり、見取り図を描く。将来美術研究をめざすためには、カメラを自分で使いこなし、スライドを作ることが必要となる。そのため、カメラを持参する学生が年ごとに増えてくる。

アルメニアの教会の基本的な建築様式は、円蓋付きバジリカ式プラン、円蓋を頂く集中式プランだ。エレバンを出たバスの両側には、岩がちのでこぼこした高原地帯が広がり、うっすらと草が生えている。南国の強烈な太陽の光をあびて、高原は黄色っぽく見える。雑草の間に、赤や橙色のけしの花がひときわあざやかに咲きほこっている。アルメニアの巨匠サリヤンの風景画が次々と思い出されてくる。途中で古い教会をいくつか見ながらバスはコーカサスの山奥へ入ってゆく。荒々しい岩肌を背に立つゲガルド僧院（中央の教会カトリクスは一三世紀のもの）、緑の木立の中にどっしりと建立されたアガルツィン修道院の景観は忘れがたい。また、バスを降りて、石のごろごろする山道を半時間ものぼった所に、もうほとんど崩壊してしまったコバイル修道院の跡が残っていた。まだ修復の手がまわらず、フレスコ画が雨ざらしのまま放置されていた。このフレスコ画を写真に収めるためには、崩れかかった岩によじ登らなければならなかった。サナイン修道院（一〇―一三世紀）のある村には、副首相時代に日本に来たこともあるミコヤン氏が学んだ学校がある。この村を下った所にアラベルディ市があり、この日は切り立ったコーサカスの山間のひっそりと立つ小さなホテルで泊まる。四人部屋で、トイレもバスも共同使用のものであったが、一人一泊八〇コペイカ（二四〇円程度）だった。

七月七日にグルジアの首都トビリシに着く。途中、アルメニア共和国とグルジア共和国の国境を通過。境界線には踏切りの遮断機のようなものがあり、そばに制服の警備隊員らしき人がいる小さな家が立っているだけだ。バスが近づくと、調べもなく、遮断機が上がった。グルジア共和国に入ったとたん、窓外の景色が大きく変っていることに気づく。それまでの岩のごろごろしていた地形が一変し、豊かな緑におおわれた地帯が広がっている……隣り合わせのコーカサスの共和国が、こうも



セバン湖（アルメニア共和国）の岸にある割り石づくりの古い教会



アルメニア共和国のエチミアジン（アルメニア教会の総本山）にある7世紀建立の寺院



マテナダラン古文書館（エレバン市。この建物は1957年、M・グリゴリャンの設計で建てられた）



グルジア共和国の首都トビリシの旧市街



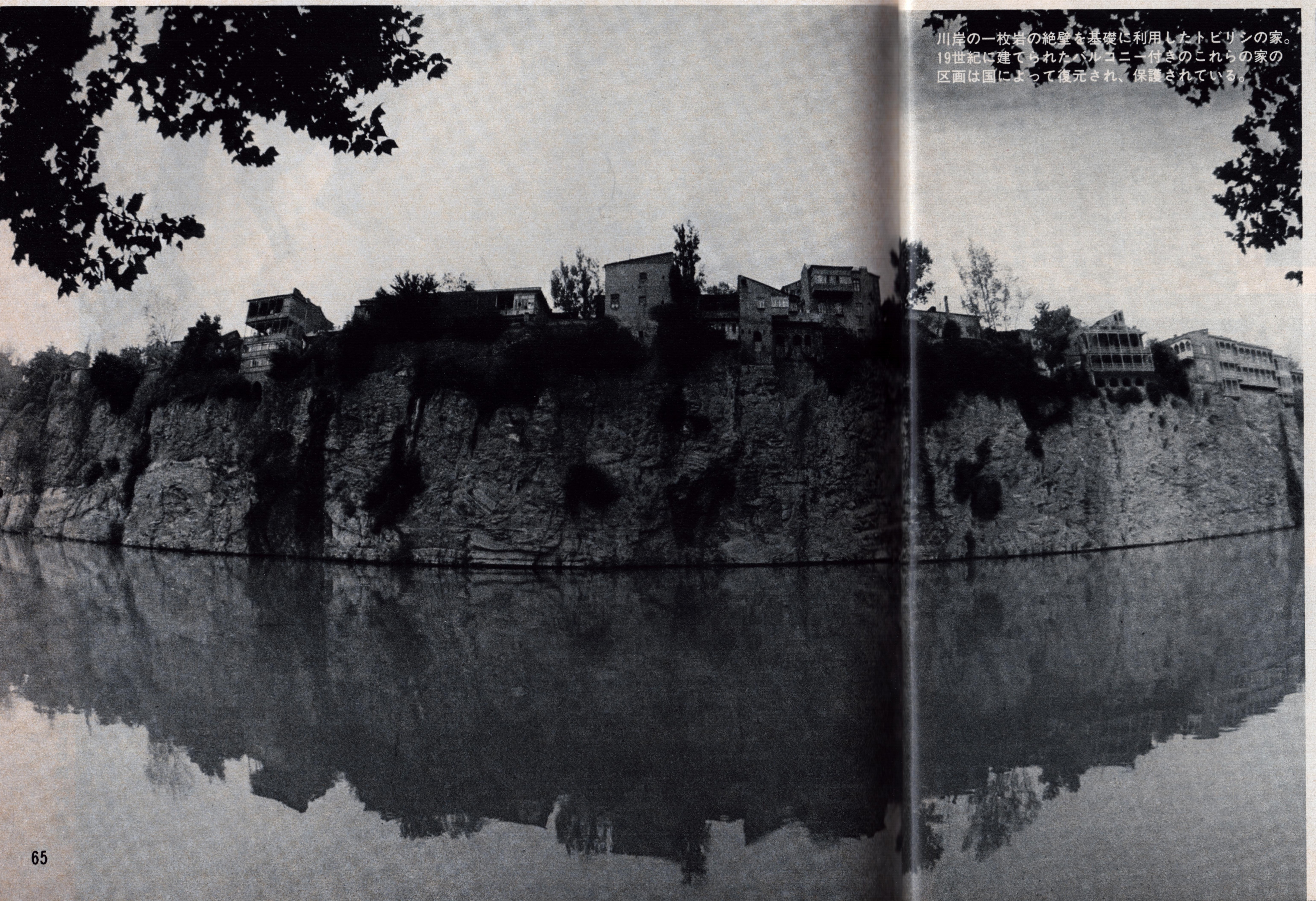
古代グルジア文化を伝えるトビリシの鐘楼（7世紀建立のものを修復）

気候、風土が違うものかと驚かされた。グルジアは太陽と肥沃な土地、豊かな自然に恵まれている。種さえまけば、何もしなくてもかってに芽が出て、実になる感じがするほどで、アルメニアとは対照的だ。

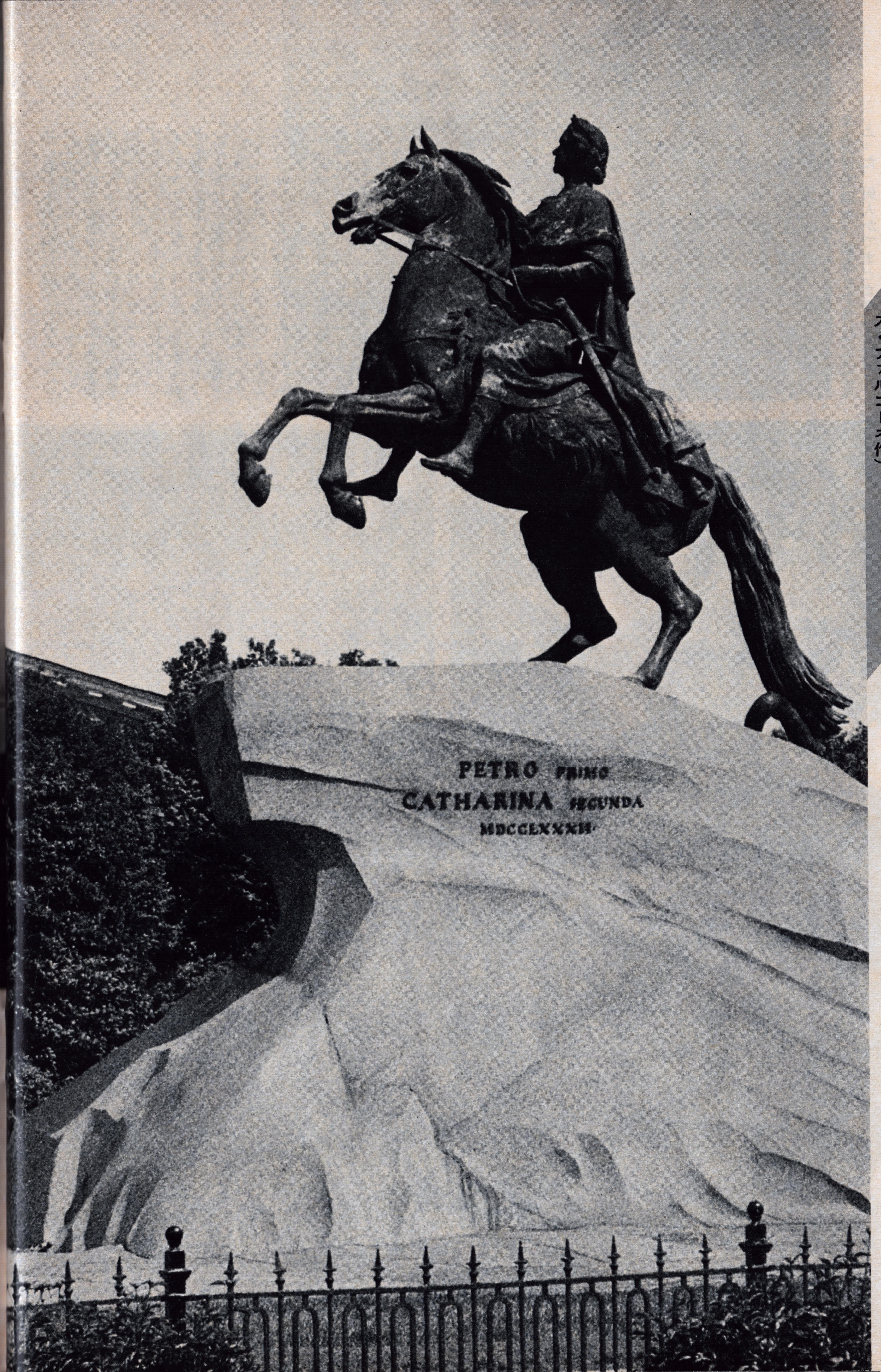
首都トビリシは、一五〇〇年以上の歴史ある古都だ。グルジアは四世紀初めにギリシャ正教を受け入れている。この共和国でも古い教会めぐりを中心に、私たちの実習は進められる。グルジアではトビリシ、テラビ、クタイシとその近郊の町や村を訪ねた。建築様式はアルメニアとほぼ同じだが、建築物のプロポーションは、アルメニアのずんぐり、どっしりとしたのに比べて、グルジアの方はスマートで、建物も高めに建てられているのが多い。トビリシから車で一時間ほど行くと、古都ムツヘタに着く。その中心にあるスベチツホベリ寺院（一〇一〇—一〇二九年）は、グルジア古代建築の代表作だ。ムツヘタの少し手前に、レールモントフの〝ムツィリ〟の舞台となったジワリ教会（六—七世紀）が、山頂にそびえ立っている。この教会から崖下をのぞくと、アラグビ川が合流し、激しく渦巻き、目のくらむ思いがするほどだ。ジワリ教会はアルメニア・グルジアの中世建築の典型的な様式の一つでもある。東西に少し長めに伸びた十字架型を基本とし、十字架の四辺は半円形をし、その各辺の間は小さな四角形をした建物で連結され、中央には円蓋を頂く。

グルジアといえば、ぶどう酒の産地で有名である。グルジア産ホワイトワイン〝ツィナンダーリ〟は、日本でも名酒の一つにあげられている。グルジアでは、ワインの銘柄は産地名がそのままついている。私たちのバスも、これらのぶどう酒の名産地をいくつも通過して行く。ツィナンダーリ村ではバスが停まったとき、男子学生が農家に出かけた。しばらくすると、彼らは原酒の入った瓶を数本持って帰ってきた。バスの中に歓声があがり、名酒の入った瓶がまわされた。歌が、踊りが飛び出した。誰かがギターを手にとった。

実習期間中、朝食と夕食は宿舎でとった。何人かでまとまり、それぞれ



川岸の一枚岩の絶壁を基礎に利用したトビリシの家。
19世紀に建てられたバルコニー付きのこれらの家の
区画は国によって復元され、保護されている。



レニングラードのピョートル一世像（一七八二年建立、エチエン＝モーリス・ファルコーネ作）

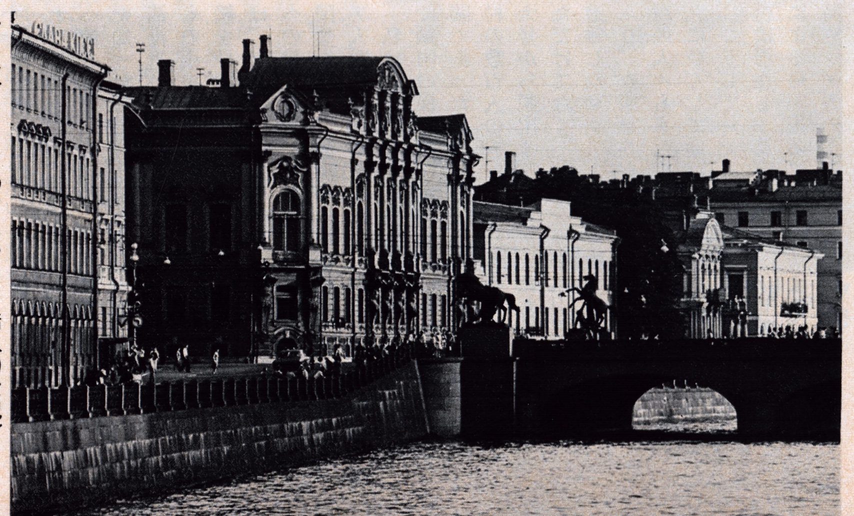


レニングラードの開閉橋リテイヌイ橋

が市場や町の食料店で買いこんだパン・野菜・果物・缶詰・ジュースなどを適当に分け合って食べた。昼食は町や村の食堂でとることが多かった。グルジアでは、山の中や古い教会の敷地内に生えている木の実や果物（りんご、チェリー、さくらんぼ、すもも、プラム）をとって食べることもあった。

三年目は、白夜のレニングラードで二週間の実習だった。ロシア建築史の中で重要な部分を占めるロシアバロック様式、古典主義様式などを代表する一八世紀―一九世紀の宮殿、教会をめぐる授業内容である。これは主に市内の交通機関、郊外電車を利用して、レニングラードとその近郊都市を夜遅くまで見学した。レニングラード郊外にある宮殿めぐりをして宿舎に帰ると、真夜中を過ぎていることもあった。一日中歩き、疲れているにもかかわらず、学生たちはまた街に出て行き、真夜中の二時、三時まで白夜のレニングラードを散策した。ネバ川にかかる大きな跳ね橋がいくつか、午前二時から五時まで中央で二つに分かれて上がり、黒いシルエットで浮かび上がる。そこを荷物運搬船がゆっくりと航行する。市内の建物も、一八世紀初めにペテルブルグ（レニングラードの旧名）を創設したピョートル一世の銅像も、すべてが黒いシルエットでそびえ立ち、白夜は私たちを不思議な幻想の世界へ引きこんでしまう。街を流れる運河沿いに歩くと、ドストエフスキーのさまざまな作品の断片が浮かんでくる。この運河は、オランダのアムステルダムを手本に造られた。真夜中の散策は、夏季実習授業とは別の楽しい白夜のレニングラードの思い出として残っている。

四年目は博物館実習である。これは、学生が選択した専門分野（五年生で書き上げる卒論のテーマに関連する）に関係する美術館、博物館で二週間から三週間、主にカタログ作成を手伝う。私はこの実習には参加しなかった。毎年実習が終わると、学生はレポートを提出する。



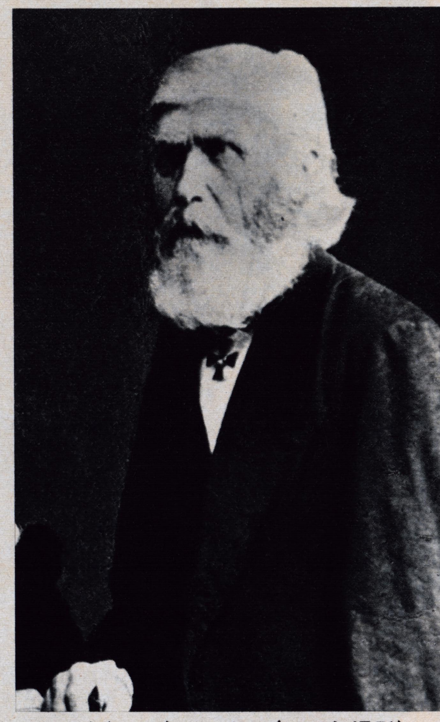
レニングラードのアニチコフ橋（19世紀）

初代駐日ロシア領事

ゴシケビチのこと

——その伝記作家グザーノフ氏を迎えて

作家 大南 勝彦



晩年のゴシケビチ（1875年撮影）

幕末に来日したアメリカ領事ハリスの名はほとんどの日本人が知っているが、同じ時期にロシア領事として函館に赴任したヨシフ・アントノビチ・ゴシケビチについては、日本人の間ではあまり知られていない。

今春から夏にかけ、私はこのゴシケビチの顕彰をしたいという関西の会社役員S氏の依頼を受けて、知人の明大教授Y氏、北大教授M氏と共に同顕彰行事の相談役を引受けた。S氏の希望は、ゴシケビチの伝記『白ロシアのオディッセイ』を書いた作家ビタリー・グザーノフ氏を招き、私が保管していた故・神崎昇氏の同作品訳稿をもとに、そのゴシケビチの伝記を自費出版（三百余部）したいというものだった。

グザーノフ氏と私は八年前から交流を持っていたし、二年前にはモスクワで、私のテレビ・ドキュメンタリー『ロシアへ渡った侍』で対談をしている。おそらく私は、グザーノフ氏を直接知るただ一人の日本人であろうし、同じ日露交流史を舞台とする作家同士でもあるので、私は事実上、同プロジェクトの事務上の責任者のような役割を負わされた。

グザーノフ氏は八月に来日して十五日間滞在し、帰国したが、これを機会に、初代駐日ロシア領事ゴシケビチについて紹介してみたい。

※　※　※

わが国では、黒船と言えばアメリカのペリーであり、日本の鎖国の夢を破ったのはペリーだとされている。確かにペリーは、武力でわが国に開国を迫り、それに成功した。しかしそのペリーが日米和親条約（神奈川条約）を幕府と結んだ同じ安政元年（一八五四年）の冬、帝政ロシアのプチャーチン使節団もまた日露和親条約を下田で締結している。

プチャーチン一行五百人が乗って下田湾に入ったディアナ号は、折から東海、関西地方を襲った諸国大地震によ る津波で大破、修理のため西伊豆の戸田湾へ向かったが、再び嵐に見舞われて自由を失い、富士川河口沖の方向へ流される。この時、ロシア船の危機を知った宮嶋村（現在の富士市田子の浦港近く）の漁師たちは、なんと百隻もの小舟をくり出して、二千トンの巨艦を戸田へ曳航しはじめたのだ。結果は、三度襲った嵐で失敗するが、異人への接触を禁じられた時代に、言わば国禁を犯し、激浪の中を命がけでロシア人を助けようとしたのである。

私はこの時こそ、民衆が自らの意志で鎖国の扉を開いた、まさに劇的な瞬間であったと思っている。この時宮嶋村の数百人の人々は、沈みゆくディアナ号から脱出するロシア人たちを助けただけでなく、積荷を海岸へ引揚げ、遭難したロシア人たちに炊き出しをしたり、衣服を与えたりしている。宮嶋村の人々もまた、地震による災害で窮乏にひんしていたのに、である。

こうしてロシア使節団五百人は戸田村に滞在し、幕府の費用で、日露合作による帰国用の帆船を建造する。この時ロシア人の指導で造った戸田号こそ竜骨を備えた西洋式帆船で、戸田の船匠たちは本格的な近代西洋式造船の基礎を習得、この経験が、後の造船日本の原点ともなった。

※　※　※

初代駐日ロシア領事となるゴシケビチは、この時のプチャーチン使節の幕僚であった。プチャーチンは、ディアナ号で来日する前年にもパルラダ号で長崎へ条約交渉に来ているが、ゴシケビチは、そのパルラダ号が一八五二年秋にバルト海のクロンシュタット港から出国して以来の、プチャーチンの片腕の一人であった。

ゴシケビチは外務省アジア局の役人であったが、日本との条約交渉の仕事に従事する前、ロシア正教の伝道員として十年間を中国で過ごしている。言わば当時のニコライ一世治下のペテルブルグではアジア通であり、中国語の通訳として日本への使節団に加わったのであった。

私は拙著『ペテルブルグからの黒船』（角川選書）で、ゴシケビチについて書いている。というのも、拙著は伊豆とペテルブルグを舞台に、幕末の日露条約交渉とその周辺を描いたものだからである。主人公はロシア使節プチャーチンと、日本側応接掛の副全権・川路聖謨、それにもう一人、伊豆でロシア人に接触し、帰国する彼等と共にロシアへ密出国した掛川藩士 橘耕斎（本名増田甲斎）である。

この橘耕斎が、ペテルブルグで外務省の役人となり、ゴシケビチの助手をして、一八五七年（安政四年）に和露辞書『和魯通言比考』を出す。こうした事情から私はゴシケビチに関心を持ち、ゴシケビチの伝記『白ロシアのオディッセイ』を書いた作家グザーノフ氏と知合い、友人となったのである。

ゴシケビチは安政五年（一八五八年）九月、函館に初代駐日ロシア領事として赴任する。某陸軍将校の未亡人であったエリザベータと結婚し、彼女の連れ子の少年も一緒であった。

聖職者の家に生まれ、神学校を出たゴシケビチは、もともと学究肌の人物であったらしい。昭和四十七年（一九七二年）十二月、レニングラードの科学アカデミー東洋学研究所で、私は日本人として初めて、前出『和魯通言比考』の下書きを見る機会を得たが、ゴシケビチ直筆のその文字は、まさに几帳面そのものといった趣きがあった。ゴシケビチは、ペテルブルグで静かな学究生活を送りたかったようだ。それが出来なかったのは、当時、日本や中国をめぐって、アメリカやイギリス、フランスにおくれをとらないために、ロシアの極東政策の推進にゴシケビチが欠かせない人物だったからである。

ゴシケビチは、仕事で行く先々で昆虫採集をしたことで知られるが、それは味気ない役人生活の中での、せめてもの彼らしい時間の過ごし方であったろう。特に蝶の採集では知られ、条約交渉で滞在した伊豆は勿論、函館では夫人のエリザベータと共に採集に精を出し、黎明期における日本のこの面での、発見と分類に貢献している。

函館では、足袋職人の木津幸吉に洋服の作り方と写真技術を教えたことが語り草になっているが、領事館やロシア正教の聖堂の建設、また領事館付き司祭のイワン・マホフや二代目の司祭ニコライと共に、結果として、日本におけるいわゆるロシア文化伝播の、基盤づくりの役割も担った。領事としてのゴシケビチは、その真面目さからか次々と幕府から借金をして色々なことをやり、終いには、ロシアへの日本人留学生を世話して、借金の返済にあてたりしている。

一方、ゴシケビチ在任中は、樺太を舞台とした日露の国境画定問題で東シベリア総督ムラビヨフが来日したり、ロシア軍艦の対馬事件など困難な問題が相次いだ時期であった。そうした中で、函館で愛妻エリザベータを亡くしたゴシケビチは、慶応元年（一八六五年）失意のうちに帰国、一八七五年（明治八年）、ビリノ（現リトワ共和国の首都ビリニュス）で六十一才の生涯を閉じた。

今回のゴシケビチ顕彰事業では、諸般の事情から、マスコミへの発表や、各地でのグザーノフ氏の記念講演、日本側研究者との資料交換など、事実上の顕彰作業が出来なくなったのは残念であった。企画の相談にあずかった者として次回を期したいと思う。



ゴシケビチの伝記作者グザーノフ氏と筆者（伊豆・戸田村の郷土造船資料博物館でディアナ号の模型を前にして）

人も馬も、ツララが垂れて

――「シベリア大紀行」取材記より

㈱東京放送文化情報部ディレクター　東條　毅

「スタート10秒前、用意願います」

はるか彼方の丘にいる撮影班に伝えるべく、無線機に語りかけますが、

「……？」

二度、三度となっても応答なし。すると、白い斜面を転がるようにスタッフの一人が駆け降りて来ます。

「寒さで無線機がイカれました」

「やっぱり……」

気温はマイナス50度C、覚悟はしていたものの、選りに選って、この忙しい時に、と恨めしさが募ります。日本で様々な耐寒実験を重ね、或る程度の自信はあったものの、現地の厳しさは想像をはるかに越えていました。カメラフィルム等はたちまち炙った海苔と化してパリパリに破れ、細い電気コード類も固い棒となって手の中でポキリ。その中で撮影を完遂しようと言うのですから、いきおい時間との勝負になり、休む間もなく動き廻る破目となりました。

そればかりではありません。冬のシベリアは日照時間が極端に短く、朝10時にやっと明るくなり、午後3時には暗くなります。我々がさらに独楽鼠と化していったのも無理ないことと申せましょう。

今日はキビツカ（馬橇）走行の日。取材班及び現地の馭者さんとヤクート馬（道産子馬そっくりで、粗食に甘んじ、耐久力抜群）が一体となって、シベリアの原野を走り廻ります。開始時には全て黒か茶色だった馬たちですが、体から発散する汗が瞬時に凍って今では全身真っ白。顎や胸毛、腹からは何とツララが垂れています。その白馬たちがまるで蒸気機関車の如くもうもうと白い息を吐き出しつつ、あえぎあえぎキビツカを引っ張るのを見ていると、本当に可哀想になって来ます。しかしそういう自分たちも似たようなもので、凍った髯からツララを垂らし、睫（まつげ）も真っ白、まばたきの度に音がする!?


厳寒の中で撮影に取り組む取材班

「タイム！」　カメラマンが突然叫ぶと、顔をゆがめて、手を叩き始めます。長時間冷え切った機械に触れていた為、二重三重の手袋の甲斐もなく、指先が凍って鋭い痛みが襲って来たのです。お互い顔を見合わせると、鼻の先や頬の一部に白い銀貨状の斑点が出来ています。凍傷の初期症状です。慌てて顔をこすりながら、「危ない、危ない」。

二百年前、この凍傷がもとで、足を切断した日本人がいるのですから……その人々の足跡を取材していて凍傷にかかったのでは、ミイラ盗りがミイラに、いえストロガニーナ（凍った肉のスライス――シベリア名物）作りが、ストロガニーナになるようなもんです!?

現地ヤクートの人々も、我々の働きぶりには、感心するやら、呆れるやら。「本当に身体は大丈夫か」と何度も心配してくれますが、何せ「画が撮れなければ日本へ帰れない」という悲愴？な我々なので、ひたすら前進あるのみ。その心意気に幸運の女神も感動してくれたのか、従来にない新鮮な場面を数多く撮影することが出来ました。

我々ＴＢＳの取材班が取り組んだのは、テレビ開局30周年記念特別番組としての「シベリア大紀行」というドキュメンタリーです。井上靖氏の小説「おろしや国酔夢譚」で有名な大黒屋光太夫という伊勢の船頭が、二百年前、十年に及ぶ厳しいシベリア漂泊の旅の末、時の女帝エカテリーナⅡ世に謁見し、帰国を許され、鎖国中の日本に生還して来た事実を踏み台にして、その足跡をたどりつつ、合わせて現代シベリアの素顔を紹介しようという大がかりなものです。気取って言えば「光太夫の波乱万丈の物語を通して高らかに謳いあげる、人間復権のメッセージ」となりますか……。


毛皮に身を固め、ヤクート馬に乗ったレポーター役の作家・椎名誠氏

レポーターは、人気作家椎名誠氏。彼は世界の各地に冒険取材を試みており、その男らしい言動が優しい心遣いと共にこの役にうってつけだと思われます。スタッフは8名。ソ連側からは、国家テレビ・ラジオ委員会から2名が、いわばコーディネーター兼お目付け役として同行しました。

取材は先ず、一九八四年樹木が全て黄金色に輝く、秋のオホーツクから始まり（外国人取材は初めてとのこと）、その冬から翌八五年にかけて真冬のシベリアを二ヵ月にわたって横断（ヤクーツク、極寒地方のウスチネラ、原野を走破しつつアルダンを経て露天掘り炭鉱のネリュングリへ、更に歴史的都市イルクーツク、大森林の中に突然出現した新しい前進基地ウスチイリムスク等々）。空撮あり、馬橇あり、トラック走行あり、飛行機ありといったバラエティに富んだ取材でした（面白い場面に、乞うご期待！といった処です）。そして、モスクワ、レニングラードで新旧のロシア文化に触れ、未来を思う……と、ざっとまあこんな具合でした。そして今夏再び緑したたるシベリアを一ヵ月にわたって訪れ、冬と夏の違いにびっくり……ところが夏のシベリアは蚊の大群の猛攻で、これ又地獄の苦しみ、つくづくシベリアはすごい処だと感じ入りました。この旅には井上靖氏も参加しました。

取材について言えば、こちらの国は日本のように能率万能主義ではないので、撮影許可を得るのにひと苦労もふた苦労もします。申請・検討・打診・ニェット（拒絶）・再申請・検討・打診・ニェット……一ヵ月や二ヵ月はすぐ終わってしまいます。そして許可を得ても、実際その場に臨めば現地担当員が又々「ニェット！」、理由を明確に説明してくれない為、納得出来ない我々としばしば衝突が起きましたが、まあ、これは国情とシステムの違い、それに「事実報道」というものに対する解釈や価値観の相違が原因していると考えられます。

勿論、素敵な出来事は数多くあり、その中でも、村々の人々の素朴な表情と、心からの歓待ぶりが大変嬉しいものでした。寒い取材から帰って来て飲むボルシチの旨さ！　そうそう、現在不評判のウオトカも極寒時の作業中では気付け薬として不可欠です。もっとも私など現地の人々の乾杯攻勢をたった一人で受けて、外へ出た途端に雪の中へバッタリ。シベリアの男は何事にも「強く」なければいけないのです！

取材の帰途、レナ河の厚い氷の上をバスで走っていると歩いて家路をたどる人々に出逢います。運転手さんはその度に車を停めてドアを開けます。ごく普通のこととして行われているその動作が、いつも他人の行為に無関心を装う都会生活に埋れてしまった我々に、心の大切な部分を思い出させてくれました。バスに乗り込んで来るオジさんオバさん達の嬉し気なはにかんだような笑顔が、澄んだ光を見るようでいつ迄も瞼に焼きついています。（放送は、今年の初冬になる予定です）

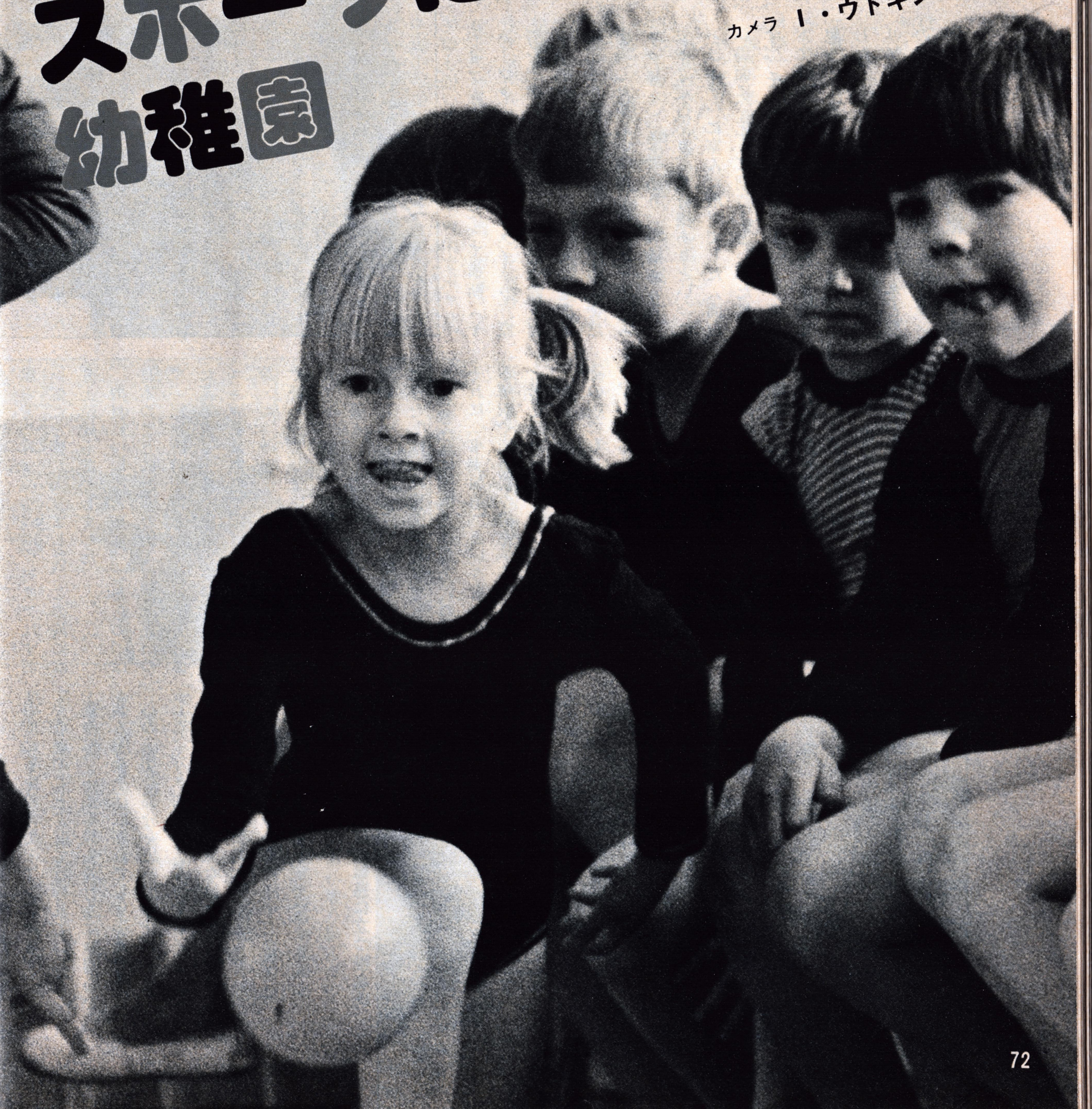

バム鉄道の線路に立つ椎名氏



速い子も、遅い子も元気いっぱい一緒に走る。

スポーツに力を入れる幼稚園

カメラ　I・ウトキン





さあ、どちらの組が勝つかな？



いちばん上まで昇るのには、やはり勇気が要る。▶
ローラースケートが大好きなターニャ・サブーロワちゃん



モスクワのボルゴグラード区第三六九幼稚園のコックさんはちょっと変わった注文を受けた。メダルの形をしたピロシキを数十個焼いてほしいというのだ。そしてこれは運動会の選手たちに賞品として与えられた。もっとも、教育的な配慮から、保母さんたちは勝った子どもだけでなく、競技に出場した子ども全員に賞を出すことにした。何しろ、子どもたちはみな3歳なのだ。どうしてみんなに賞を上げないわけにいこう。

運動会は大人の運動会と同じように行われた。まず、選手たちの入場行進、旗の掲揚式、それから競技だ。種目は徒歩レース、競走、三輪車競走、走り幅跳び、縄跳び、ボール投げ。子どもたちはまだ計算がよく出来ないから、得点は小さなバケツに旗を立てて示すことにした。組ごとにバケツを決め、ある組が勝ったら、その組のバケツに旗を立てていく。全競技が終了して、旗のいちばん多かった組が優勝というわけだ。

別の日にはもっと年長の子どもたちの運動会が行われ、年少の子どもたちは観客になった。

この幼稚園で運動会が初め



ロープはむずかしい器具だが、年長組の女の子たちの多くは上手に綱登りができる。

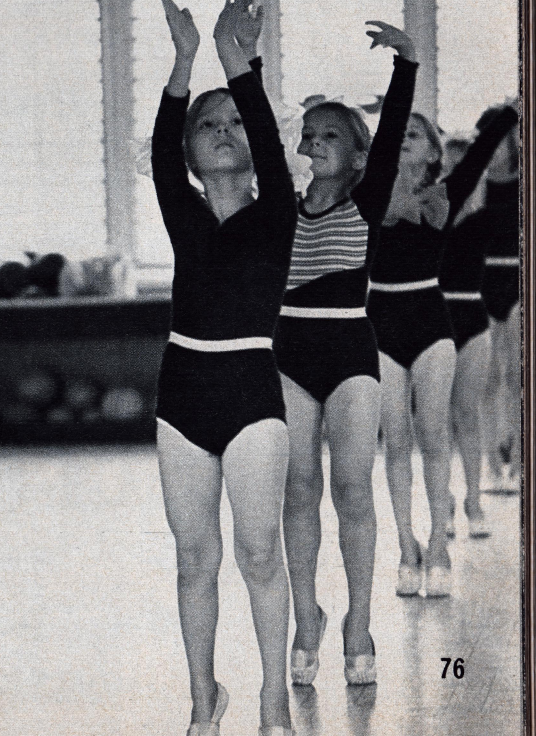
▼輪を使った体操は子どもたちの気分を高め、注意力を発達させる。

て行われたのは5年前。それ以来、夏と冬に定期的に開かれている。天候によって外の運動場で行われる場合もあ



▲2分間のボールころがしは子どもたちにとっては遊びの一つだが、動作を調整する訓練でもある。

つま先で歩くのは、見かけほど簡単ではない。



し、屋内の体育室の場合もある。だが、ここでは運動会の日だけ特別にスポーツが行われるというわけではない。園児たちは毎日、朝の体操をし、競技の要素とおとぎ話の筋が組み合わさったいろいろなゲームをしている。

ガリーナ・シローカヤ園長は言う――「私たちが園児を積極的にスポーツに親しませるようになったこの5年間に、子どもたちの風邪、咽頭炎、気管支炎にかかる回数はかなり少なくなりました。たとえば、一九八四年には八三年と比べて園児の発病数は20%以上も減りました」

この幼稚園の冬の運動会も実にカラフルで楽しい。種目はスキー競走、アイスホッケー、ソリ滑り。そしてこれらの競技はみな軽快な音楽をバックにして行われるのだ。





恋人同士……（V・チェルノフ撮影）

短信アラカルト

オオワシの保護

このほどクロノツコエ自然保護区（カムチャツカ州）の職員たちはオオタカの巣（複数）を点検した。巣の状態——巣を支えている木の枝に異常がないか、巣が雪で壊されていないかを調べるためである。毎年春に、オオワシは巣を修復する。やがて巣は直径3m、高さ2mになるが、すべての木が重い巣を支えきれるわけではない。

オオワシはソ連領内にだけ巣をつくり、カムチャツカがこの珍鳥の一番好きな生息地になった。ここの自然保護区内には約四〇〇〇羽のオオタカが巣をつくっている。この力強い美しい鳥は極めて神経質で、環境のどんな変化にも非常に敏感に反応する。自然保護区のめぐまれた条件のもとでさえ、オオタカは平均して2—3年に1羽のひなしか生まないので、保護区の職員はオオタカの増殖にけんめいである。

鉄も〝成長〟する!?

金属は熱せられると膨張することはだれでも知っている。熱膨張率——2%以下も昔から知られている。しかしウクライナ共和国のドニエプロペトロフスク冶金大学の研究者たちは金属の新しい性質を発見した。門外漢なら実験を観察して、これは科学実験ではなく手品だ、と思うだろう。金属棒の長さが見る見るうちに2倍、3倍、5倍になる！

種は簡単だ。金属を八五〇度から九五〇度までの間隔で周期的に熱したり、冷やしたりすると、金属は〝ふくれ〟始める。ただし空気中ではなく、水素の環境中でのことだ。

ソ連の学者が発見した現象により、金属と合金の新しい効果的な処理法が開発されよう。

電子ビームで金属を溶かす

全ソ・レーニン記念電機研究所（モスクワ）は、どんな金属でも溶かす強力な電子ビームを出す電子銃を開発した。その用途は冶金工業、機械工業などと幅広い。

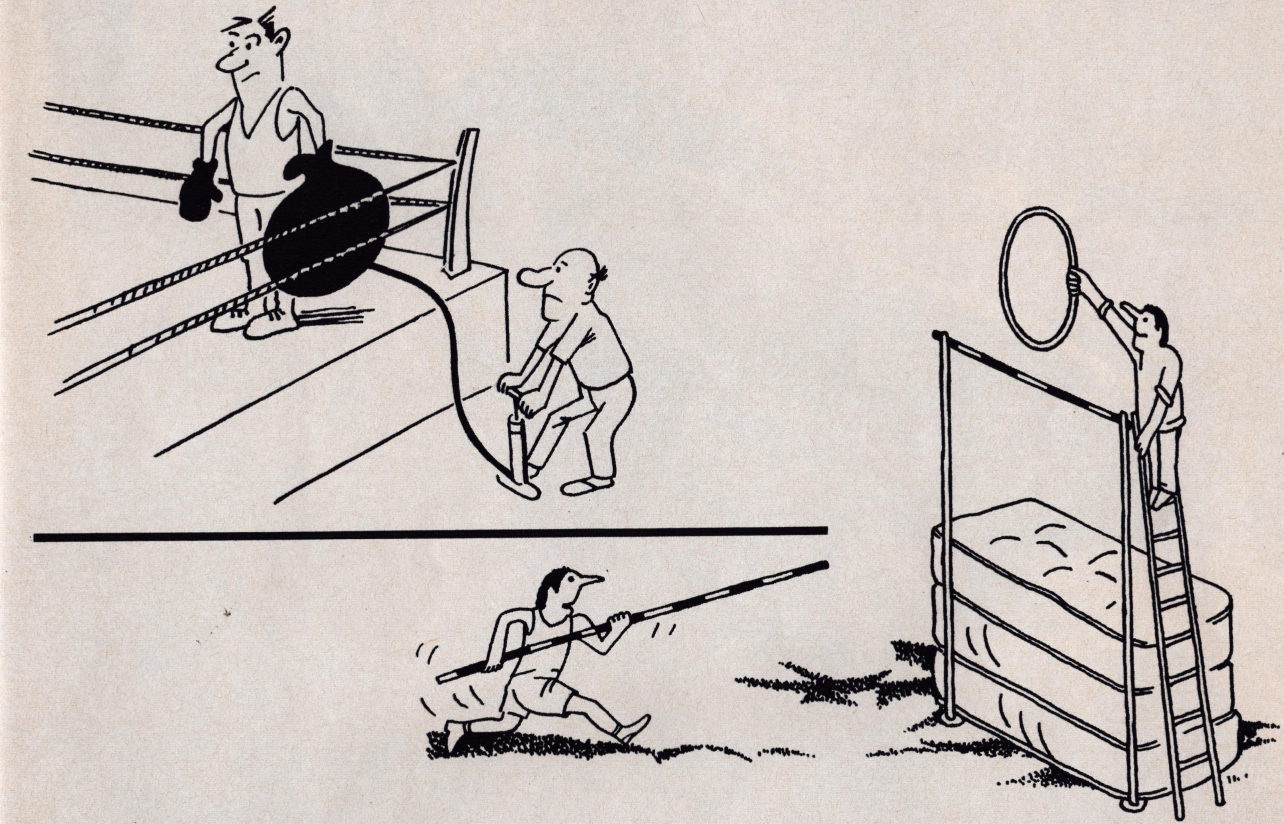
電子銃の構造は普通のテレビのブラウン管に似ているが、出力は数百万倍大きい。電子銃の最重要ユニットは強力な電子ビームを出す陰極。それはタングステンまたはタンタルでつくった大きさが小型貨幣ほどの電極板である。溶解点に近い温度にまで電流で熱せられた電極板は濃密な電子ビームを出し、それが電場によってものすごいスピードに加速される。このような電子ビームはどんな難融性の物質をも溶解するか、または蒸気状に変える。新電子銃によって絶対純度の金属が得られる。なぜなら溶解は超高真空で行われるし、電子ビームは殺菌されていて、溶融状の金属に不純物を持ち込まないからである。

冬季五輪を誘致するレニングラード

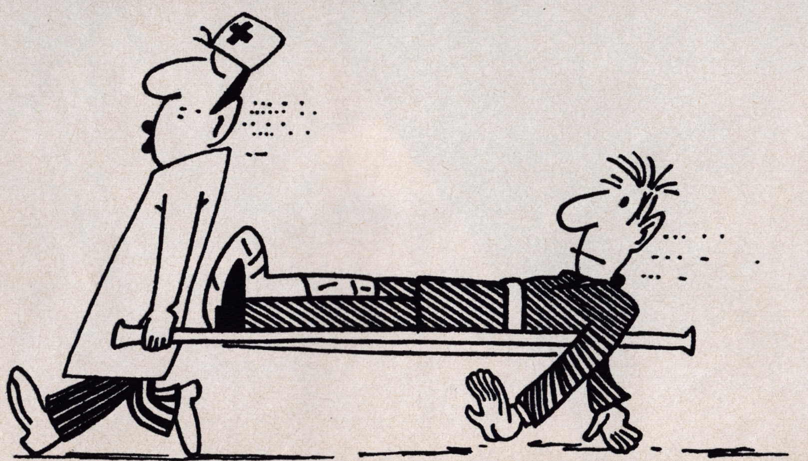
ウラジーミル・ホディリョフ・レニングラード市長はレニングラードに滞在中のサマランチ国際オリンピック委員会（IOC）会長に一九九六年の第17回冬季オリンピック大会開催地に立候補する正式申請書を提出した。

レニングラードはスポーツ界では有名だ。市民の中に74人のオリンピック・チャンピオンがいる。5年前のモスクワ五輪ではサッカー競技の予選会場になった。市はオリンピックの選手や観客のどんな要求にもこたえられるすばらしいスポーツ施設を備えている。たとえば二万六〇〇〇人の観客を収容するレーニン記念スポーツ・コンサート・コンプレクスと六〇〇〇人を収容するスポーツパレス「ユビレイヌイ」はアイスホッケーやフィギュアスケートの会場に使える。七万二〇〇〇人の観客を収容するキーロフ・スタジアムは将来のオリンピック大会の開会式会場に使用できる。





ユーモア



今日のソ連邦 一九八五年10月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部(郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03・447・3536)
定価　一五〇円



